ISSN 0289-4130

研究紀要

第14号

1998

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

研　究　紀　要

第 14 号

1 9 9 8

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目　　次

［論文］

菱形文の成立と変形、そしてその諸相……谷井　彪（ 1）

木曽良遺跡の研究（1）……村田　健二（ 25）
— 弥生時代の環濠集落を中心に —　剱持　和夫
書上　元博
石坂　俊郎
福田　聖
佐藤　康二

集落出土のヘラ記号からみる須恵器の生産と流通……末木　啓介（ 89）
— 武蔵国の場合 —

国司館（こくしのたち）の基礎的研究……田中　広明（119）

集落出土のヘラ記号からみる須恵器の生産と流通

― 武蔵国の場合 ―

末　木　啓　介

要約　須恵器につけられたいわゆる「ヘラ記号」について、南比企窯跡群を例にその意味を探る。次いで、武蔵国において集落遺跡から出土するヘラ記号の分布から、ヘラ記号が集落内でも使用されていた可能性を考える。

また、多くのヘラ記号が出土する集落遺跡の検討を行い、集落内での須恵器供膳具の管理について考察し、その在り方が多様であったことを指摘する。そして、これらの分析を通じて、武蔵国における須恵器生産への国司・国府の直接的な関与は薄く、窯業生産は在地有力者により経営されていたことを明らかにする。

はじめに

奈良時代以降武蔵国ではそれまで日常什器の主役であった土師器が減少し、須恵器が大量に生産されるようになる。

須恵器の生産量は莫大で、武蔵では四大窯跡群が相次いで営まれ、安定的な生産と流通が図られていた。

須恵器にはよく『ヘラ記号』といわれるものがついている。いままであまり気にしたこともなかったが、最近地方官衙遺跡の墨書土器集成を試みる機会があった。そこでなにげなく報告書をめくっていると、このヘラ記号が目につき、出土の仕方に一定のルールがあるような気がしてきた。

ヘラ記号は須恵器製作段階でつけられていることから、生産の実態を表すものと考えらているが、集落から出土するものを調べると流通の様子も把握できそうである。

特に武蔵国では、四大窯跡群の一つである南比企窯跡群（鳩山窯跡群）で大規模な調査がなされ、生産・流通についての研究も多くなされている。しかもこの南比企窯跡群を中心とする地域で生産された須恵器には、白色針状物質といわれる混入物が特徴的にみられ、これを手がかりとすれば生産地との関連が比較的容易に観察できる。

本論ではこうしたことから、武蔵国でも南比企産の須恵器についているヘラ記号を中心に考察を加えていく。

1　ヘラ記号とは何か

一口にヘラ記号といっても、どのようなものがあって、どのように分けられるのであろうか。

まず、土器が焼成される前につけられたものと、後につけられたものに大きく分けられる。前者は、粘土に可逆性がある段階でつけられていることから、確実に須恵器製作時につけられたと考え

られる。後者は焼成後に窯場でつけたものもあるかもしれないが、いつの時点でつけられたものか断定することは難しい。ここでは、焼成前のものをヘラ記号、焼成後のものを線刻と呼んで区別することにする。

両者とも一、＝、×などの記号のほかに、文字がつけられているものがある。この文字がついているものは、ヘラ文字、線刻文字として表現する。また、ヘラ状の工具ではなく文字や記号を掘った道具を押しつけているものを押印と呼ぶ。

ヘラ記号の意味については、古くから様々な論功がみられる。その研究を整理してみると次のように分けられる。

《工人識別説》代表的なものに中村浩氏（中村1981）のものがあげられる。これは一つの窯から複数の記号が確認されることを論の基本にしている。

中村氏は、陶邑 MT206—Ⅰ号窯跡の例を示して、土器の配置がヘラ記号ごとにある程度まとまっていることから、本来異なった窯で焼成されるべき土器が、窯が壊れてしまうなど不慮の事態により、一つの窯で焼成することになった場合、両者を区別するために、ヘラ記号がつけられたと考えるものである。

中村氏の説を土台にして野上丈助氏は陶邑の工人集落の変遷を考察した(野上1980)。これも中村氏と同じように、一つの窯から複数の記号が確認されることを根拠としてる。

中村氏と大きく異なるのは、最初から複数の記号が一つの窯で焼成されることを想定している点で、製作した工人または工人集団を識別するものであると考えている。

《数量把握・仕訳説》山中章氏（1989）や服部敬史氏（1981）があげられる。山中章氏は線刻土器を取り上げた論文のなかで、ヘラ記号についても若干ふれている。そこでは陶邑MT106—1号窯のヘラ記号と無記号のものの数量を数えて、さらに記号ごとの出土量を計算した結果から、生産量の把握のためにつけられた可能性があることを指摘している。

《使用者要求説》久永春男氏（久永1958）や加藤岩蔵氏（加藤1970）など、主に東海地方の研究者に代表される。これは、発注者（使用者）の意図によりヘラ記号がつけられたと考えるもので、使用者が自己の占有や一定の用途を示すために、生産者にあらかじめ記号を指定していたと推定するものである。しかし、ヘラ記号の種類の少なさから反論が多く、現在では否定的である。

以上の3説を主なものとして上げることができるが、各地で調査されている窯跡の報告では、工人識別説を利用してヘラ記号の意味を考えたり、工人組織に迫ろうとするものが多い。しかし、これらの論を述べている方々も決して数量把握・仕訳説を無視しているわけではなく、前提としてその可能性を示唆されており、むしろそれは公然の事実であると認識しているようである。

こうした中で田辺昭三氏は早くから、ヘラ記号の性格把握には消費地での出土状況の検討が不可欠であると指摘している(田辺1966)。しかし、その後、この点を積極的に進めようとする試みは少なく、ヘラ記号の研究は、もっぱら窯跡での工人組織研究の材料としての扱いが目立つ。

本論は、こうした指摘に基づいて、集落出土のヘラ記号の分析を通して、その新たな意味を模索しようとするものである。

なお本論では時期を8世紀前半後半、9世紀前半後半、10世紀の5時期に大きく分けることにす

種別	供膳具	8世紀前半	8世紀後半	9世紀前半	9世紀後半	総計
記号	×	24	131	22	4	181
	ー	7	54	18		79
	＜	8	41	1		50
	＝	1	33	4	1	39
	卅		10	1		11
	N		4	1		5
	W		3	2		5
	三		2	1		3
	≦		2			2
	卌		2			2
	丗		2			2
	＜＞		1	1		2
	廿	1				1
	⊠		1			1
	⋀		1			1
	⋖		1			1
	≦		1			1
	T		1			1
	イ		1			1
	ハ		1			1
	入				1	1
	？	3	19	8	1	31
記号 計		44	311	59	7	421
文字	上	6	15			21
	大	3	10	1		14
	七	4	6			10
	山		7			7
	木		6			6
	立	1	3			4
	乃	1	3			4
	七π		3			3
	田		3			3
	大里×		2			2
	允		1			1
	瓦		1			1
	吉		1			1
	四百内		1			1
	首×		1			1
	大仲		1			1
	天		1			1
	不		1			1
	父瓦		1			1
	又		1			1
	万		1			1
	文字様線刻		1			1
文字 計		15	70	1		86
押印	内(押印)	24				24
	立(押印)	3	1			4
	大(押印)	2				2
	木(押印)	2				2
	本(押印)		1			1
	田(押印)		1			1
	(押印)		1			1
押印 計		31	4			35
総計		90	385	60	7	542

第１表　南比企窯跡出土のヘラ記号・文字・押印（供膳具）

る。南比企窯跡群との対応関係は、鳩山０～Ⅱ期を８世紀前半に、鳩山Ⅲ～Ⅴ期を８世紀後半に、鳩山Ⅵ・Ⅶ期を９世紀前半に、鳩山Ⅷ・Ⅸ期を９世紀後半に、鳩山Ⅸ期の一部を10世紀代として扱う（渡辺1990ｂ）。

2　ヘラ記号の種類

ここで主に取り上げる南比企窯跡群ではどのくらいのヘラ記号が出土しているのであろうか、第１表は、南比企窯跡群から出土した供膳具につけられたヘラ記号とヘラ文字・押印を示している。これをみると、ヘラ記号が421点、ヘラ文字が86点、押印が35点である。時期的にはもっとも操業が盛んであった８世紀後半に出土量が多く、ヘラ記号で311点と総数に対して74％の出土量である。ヘラ文字も同様に８世紀後半の出土率が81％と多いが、押印は出土した35点中31点が８世紀前半に出土していてヘラ記号・文字とは異なる様相をみせる。

ヘラ記号の中で多くみられるものは「×」「―」「＜」「＝」で、30個を超える出土量がみられる。特に「×」は181点とヘラ記号421点の43％を占める。ちなみにこの４種類がヘラ記号全体に占める割合は83％である。またヘラ記号は、粘土に可逆性がある段階でつけられているわけで、工具の性質上、直線で表現されているものがほとんどである。そのほか、出土量は少ないが、「卄」や「卅」のようにあきらかに数字を表現したものがみられる。

ヘラ文字で出土量が多いのは「上」「大」「七」でこの３種類は10点以上の出土である。これ以外にも「山」「木」「乃」「立」などが多いものといえる。この中で「大」としたものは、「―」「＜」を組み合わせたヘラ記号である可能性もあるが、あきらかに「大」という文字を意識しているものがあることから、「大」のヘラ文字は確実に存在していたといえる。

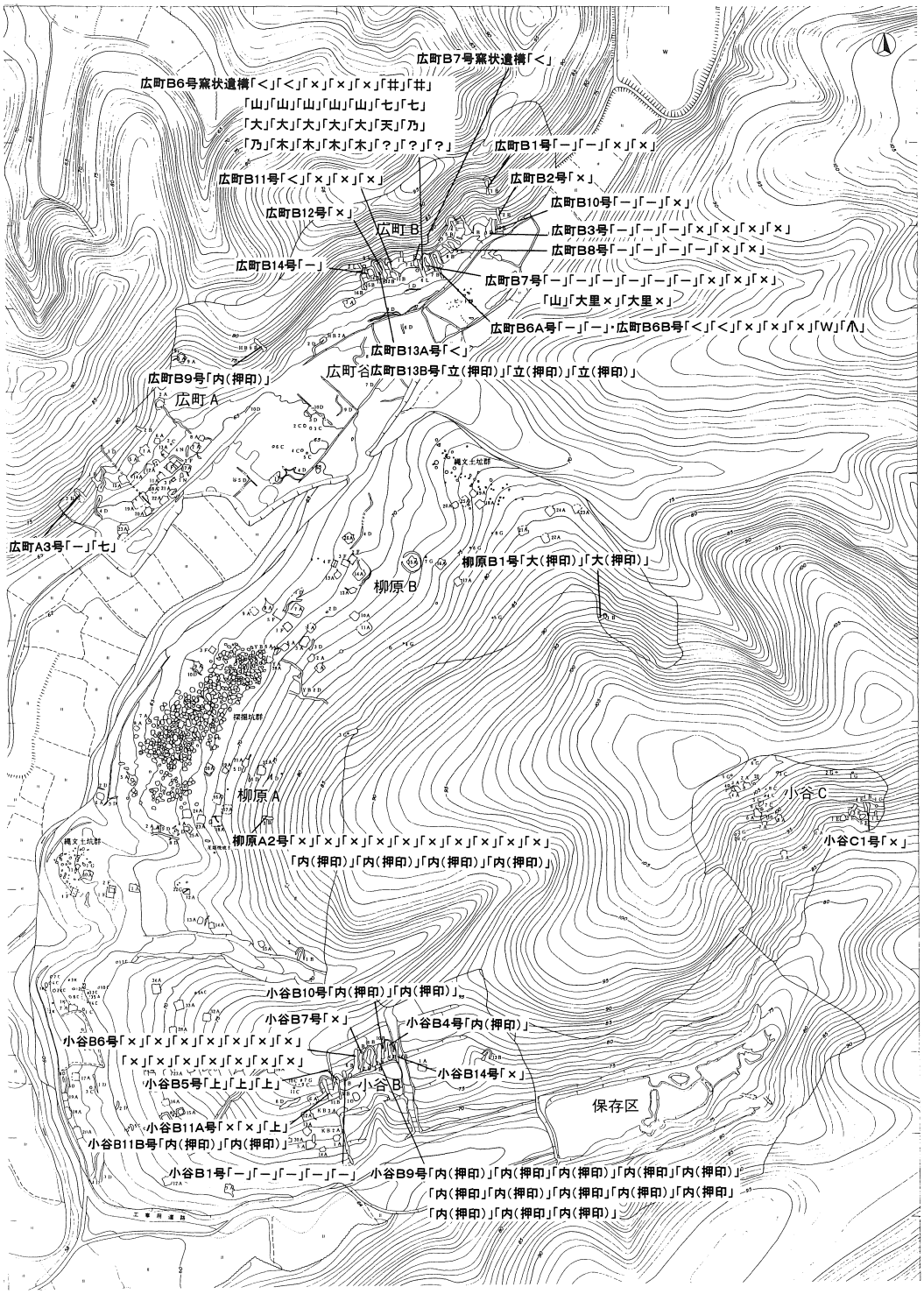
押印では「内」が最も多く、35点中24点を占める。「内」に関連して、「四百内」というヘラ文字が１点出土している。このヘラ文字は、虫草山地区17号住居跡から出土しているもので、報告書ではこの「四百内」を「四百」と「内」に分けて、「四百」を数量、「内」を供給先と考えることが可能であるとしている（渡辺1992）。「内」の押印は鳩山Ⅰ期の「特殊かえり蓋」にみられ、ある特定の供給先を示している可能性が高いといえる。

次にヘラ記号・ヘラ文字・押印が窯跡群内でどのように分布しているかをみてみる（第１図）。これをみると、「×」「―」などのヘラ記号は、窯跡群内のほぼ全域に分布していることが分かるが、ヘラ文字や押印は特定の窯に出土が集中することが分かる。「山」「大」「木」は広町Ｂ６号窯状遺構、「内」の押印は小谷Ｂ９号窯と柳原Ａ２号窯、「大」の押印は柳原Ｂ１号窯がそれである。

このことから考えて、ヘラ記号とヘラ文字・押印を同じ目的でつけたと考えることは難しく、別の用途があったと考えるのが妥当である。

それでは集落から出土する南比企産の供膳具につけられたヘラ記号などは、どのような傾向をみせるのであろうか。第２表をもとにみてみると、ヘラ記号については、窯跡群から出土する傾向と同様で「×」「―」「＜」「＝」の４種類が20点を超える出土量がみられ、４種類だけで、ヘラ記号385点中の245点、率にして64％を占めている。

これに対してヘラ文字の出土量は少なく、24点だけである。この中には線刻文字が含まれている



第１図　鳩山窯跡群出土のヘラ記号・文字の分布

種別	供膳具	6･7世紀	8世紀前半	8世紀後半	9世紀前半	9世紀後半	10世紀	時期不明	総計
記号	×	1	25	37	36	24	2	3	128
	ー		6	23	22	18			69
	＜		1	9	11	5		1	27
	＝		3	5	4	9			21
	＃		2	6	4	2			14
	N		1	7	4	2			14
	W			3	5				8
	≡			3	2	2			7
	卄				1	4			5
	≦				2	2			4
	C			1	2				3
	Y					2			2
	卅				1	1			2
	|/				1	1			2
	＊		1		1				2
	××　　NV			1					1
	WV			1					1
	＃ー			1					1
	＜, N			1					1
	ハ		1						1
	カ					1			1
	◎, ＃！				1				1
	人				1				1
	≡				1				1
	？	1	10	24	16	16			67
記号 計		2	50	123	115	89	2	4	385
文字	大		1	2	4	2			9
	丸, 丸					5			5
	丸					3			3
	七		1	2					3
	王			1					1
	石			1					1
	月				1				1
	田				1				1
文字 計			2	6	6	10			24
押印	内(押印)		1						1
	木(押印)				1				1
押印 計			1		1				2
総計		2	53	129	122	99	2	4	411

第２表　集落出土の南比企産ヘラ記号・文字・押印（供膳具）

可能性もあり、出土量はさらに減少すると思われる。また、南比企窯跡群で確認された出土量の多い４種類のヘラ文字の中で、集落から出土しているのは「大」と「七」だけである。また、押印については「内」と「木」が１点ずつしか出土していない。

先に触れたようにこれらの文字が、「内」の押印のように供給先を示しているとすれば、今後まとまった形で特定の集落から、これらのヘラ文字や押印が出土する可能性が高いといえる。

このように集落出土例からもヘラ記号とヘラ文字・押印は性格が異なるといえるのである。文字が供給先を表しているのならば、ヘラ記号はその数の多さと、時期や窯跡ごとに差が見られないことから、南比企窯跡群の操業に欠かせない作業（数量の把握や仕訳の際の目印など）に日常的に使用されていたものであるといえる。

南比企窯跡群では須恵器工人集落も調査が大規模に行われているが、広町Ｂ２号住居跡から出土

種別	供膳具以外の器種	8世紀前半	8世紀後半	9世紀前半	時期不明	総計
記号	×	1	7	2	2	12
	卅		3		1	4
	＝		2			2
	N			2		2
	―		1			1
	＜		1			1
	卌		1			1
記号 計		1	15	4	3	23
文字	大		4	1		5
	私印		4			4
	七		1		1	2
	廣		2			2
	乃		1			1
	有		1			1
	石成		1			1
	大有		1			1
	太田				1	1
	口斗[	1				1
	大マ廣道[		1			1
	大𨻶布直六十段		1			1
	此(壷)(使)人者(徳)万富貴[ ]事仕		1			1
文字 計		1	18	1	2	22
押印	内(押印)	1				1
	私印(押印)		1			1
押印 計		1	1			2
絵	線画	1				1
	絵画風へら書き			1		1
絵 計		1		1		2
総計		4	34	6	5	49

第３表　南比企窯跡群出土のヘラ記号・文字（その他の器種）

した供膳具80点のうち、70％にあたる60点にヘラ記号がみられ、このうち53点が「＝」である（渡辺1992)。ヘラ記号のつけられた土器は、意図的に積み重ねられ、そのほとんどが破損品であることから、渡辺氏は窯の前庭部で行われた「１次選別」に次ぐ、「２次選別（住居内選別)」の痕跡であるとしている。つまり、特定のヘラ記号が選別作業の基準になったと考えられるわけである。

供膳具のように大量生産されたものに多く見られるヘラ記号が、数量の把握や仕訳に必要であったことは、供膳具以外の器種（供膳具のように一度に多量に焼成されるものではない大型品）につけられたヘラ記号・文字との比較でも分かる（第３表)。

この表は南比企窯跡群から出土したものを表しているが、ヘラ記号が23点、ヘラ文字が24点とほぼ同じ出土量である。また文字ではなく文章になっているものが多いのも特徴である。つまり、大型品は一度の焼成での生産量の少なさから、数量把握や仕訳の煩雑さが少ないために、ヘラ記号が少なく、逆に供給先や使用者が特定される場合が多いことから、ヘラ文字が多いと考えられるのである。

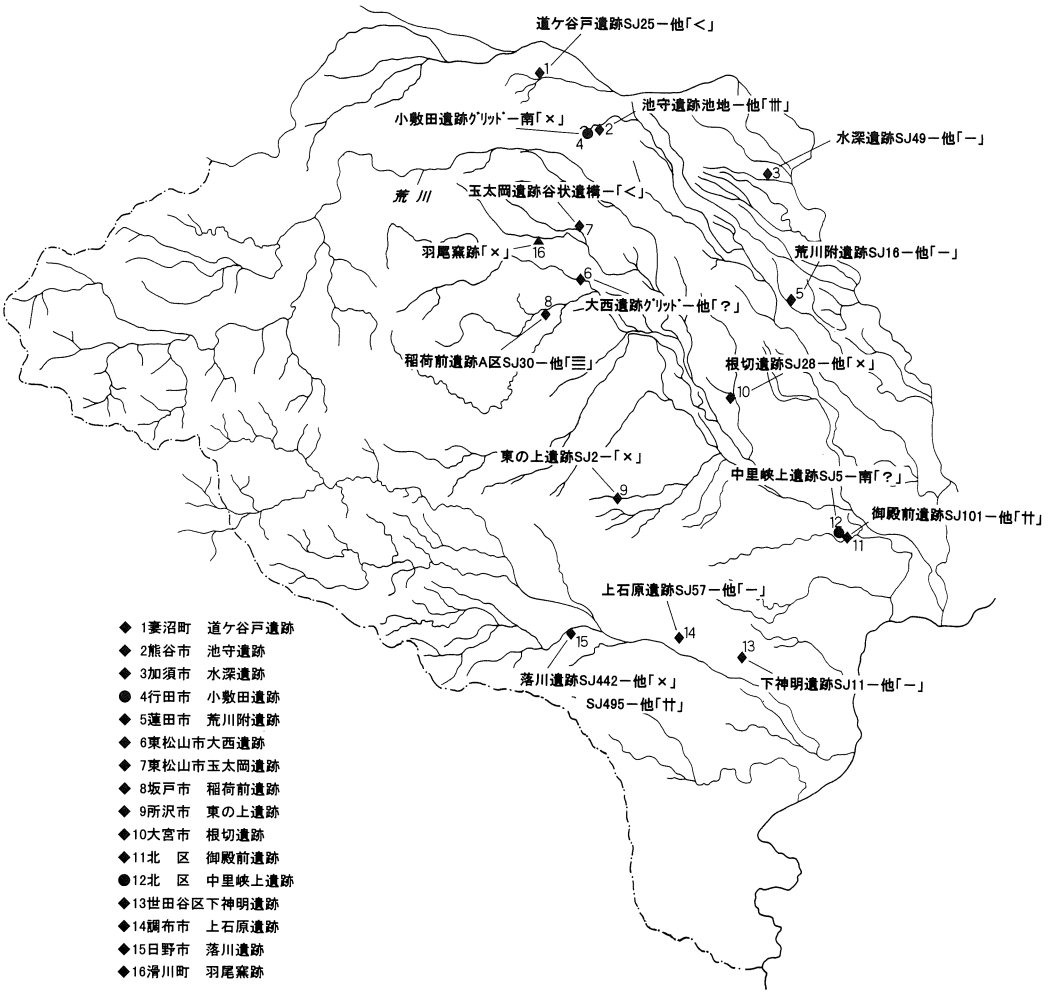
これまで述べてきたような供膳具におけるヘラ記号・文字などのにみられる特徴は、南比企窯跡群で生産されたものに限らない。第４表は南比企産以外の集落出土の供膳具につけられたヘラ記号･文字を示しているが、ここでも出土量の多い記号は「×」「―」「＜」「＝」の４種類である。武

種別	供膳具	6･7世紀	8世紀前半	8世紀後半	9世紀前半	9世紀後半	10世紀	総計
記号	×	3	14	32	38	48	9	144
	ー	3	3	19	26	22	11	84
	＜	1	4	6	6		2	19
	＝		1	2	4	5	4	16
	廿			2	1	4	3	10
	N			3	2		1	6
	卅		1	2		2		5
	W	1	1	1				3
	干				2	1		3
	三				1	1	1	3
	＊	1				1		2
	卌				1	1		2
	条線				1	1		2
	線刻					2		2
	𠀋	1						1
	廿	1						1
	又		1					1
	𠂉		1					1
	∩			1				1
	○				1			1
	×．ー					1		1
	×ー					1		1
	×・×						1	1
	？	1	8	12	12	19	12	64
記号 計		12	34	80	95	109	44	374
文字	大				1	3	1	5
	七		1	2	1	1		5
	田						2	2
	上		1					1
	及者天大日			1				1
	田			1				1
	奉			1				1
	坏			1				1
	一，足				1			1
	大大				1			1
	道				1			1
	内				1			1
	根イ乃					1		1
	法					1		1
	有					1		1
	人の下に不明刻書						1	1
	𡗜				1			1
	尓				1			1
	益					1		1
	大王七月						1	1
	天						1	1
	都筑郡口						1	1
	？						1	1
文字 計			2	6	8	8	8	32
総計		12	36	86	103	117	52	406

第４表　集落出土の南比企産以外のヘラ記号・文字（供膳具）

蔵国の様々な窯で焼成された須恵器につけられたヘラ記号の種類が乏しいことは、ヘラ記号が特定の工人集団を表すものとは考えにくいことを示している。

ここまでヘラ記号・文字や押印についてその意味を検討してみたが、このように土器に記号をつけるという行為が武蔵国ではどのような推移をもっているのか次に検討してみたい。



第２図　古墳時代の須恵器のヘラ記号分布

3　ヘラ記号の推移と分布

【古墳時代（第２・３図)】

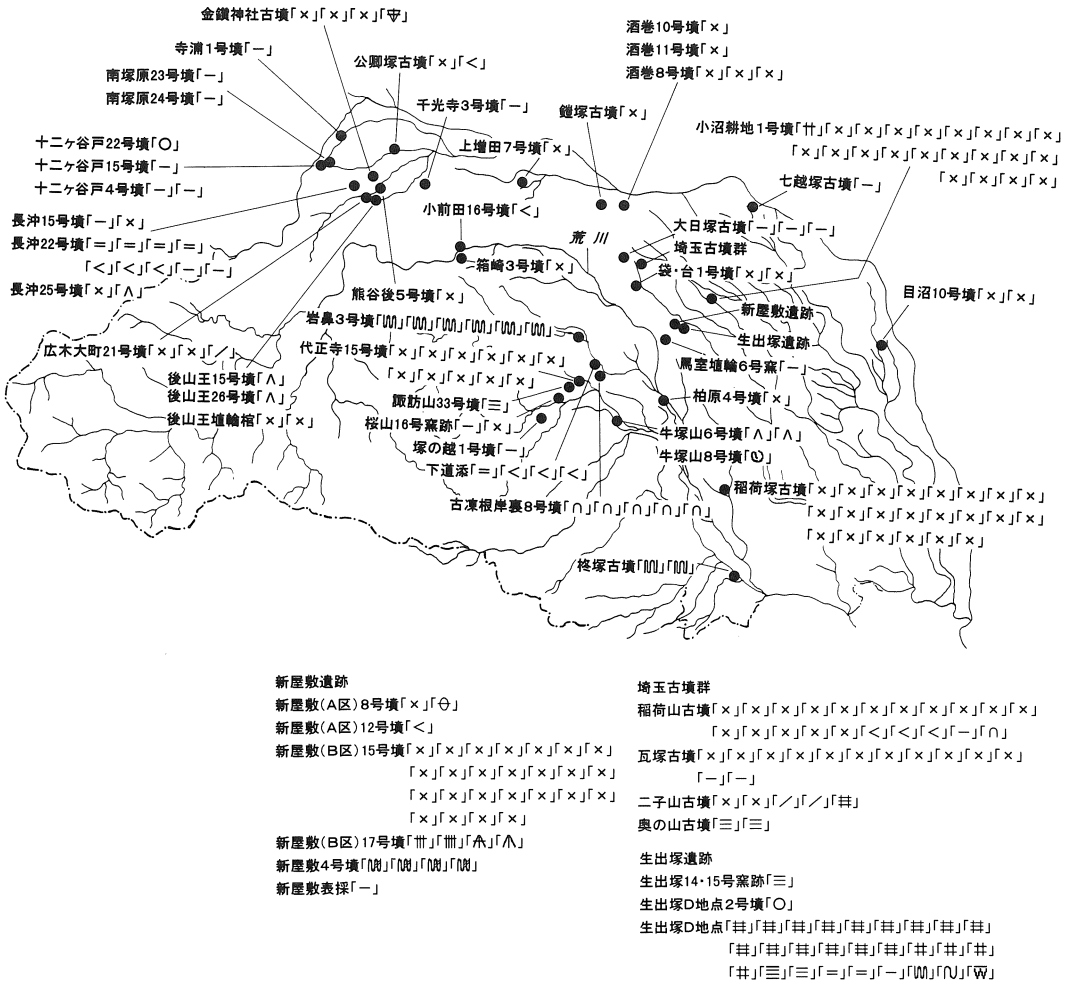
武蔵国において須恵器が大量生産される以前の段階である。

この時期の集落出土の須恵器に見られるヘラ記号の分布を第２図に示した。この図で●は南比企産を、◆は南比企産ではないものを、▲は南比企産とそれ以外のものがいっしょに出土した遺跡を表している。また記号の前にある『南』・『他』も同様な意味である。

この図から南比企産のヘラ記号は、わずかに小敷田遺跡と中里峡上遺跡の２点しか出土していないことが分かる。このほか大西遺跡出土のものは桜山窯産とも考えられるが確証がない。

また、８世紀以降に比べて出土量が少なく、そのほとんどが荒川水系に分布していることが指摘できる。ヘラ文字がみられないのも特徴であろう。

武蔵国（註１）における６・７世紀代の須恵器窯は、広義の南比企窯跡群に属する桜山窯・根平窯・小用窯・舞台窯や、南比企窯跡群に隣接する羽尾窯のほか、近年の調査により荒川上流の末野



第3図　埼玉県における埴輪のヘラ記号分布

窯跡群にも6世紀末から7世紀初頭の窯が検出されている(福田1998)。しかし、わずかに羽尾窯(第2図16)出土の甕に「×」がみられるだけで、そのほかの窯からヘラ記号・文字は、検出されていない。この状況は、8世紀以降武蔵国で須恵器が大量生産されるとともに、南比企窯跡群を中心に多量のヘラ記号が分布する様相とは異なり、ヘラ記号を使用しなくてもよい須恵器の生産と流通体系であったためと思われる。つまり、古墳時代の須恵器流通は、在地の須恵器生産が占める割合は8世紀以降に比べて低く、荒川水系を利用した他地域からの須恵器の搬入に大きく依存していたといえる。そして、その中に散発的にヘラ記号がついているものが混じっているという状況がみられるのである。

このほか、古墳時代に在地の窯で盛んに生産され、流通していた窯業製品として埴輪がある。武蔵国における埴輪の出現時期にはさまざまな論議があるが、ここでは、埴輪生産に窯を使用するようになった5世紀後半以降を対象として、埼玉県内だけであるが、埴輪につけられたヘラ記号の分布図を作成してみた(第3図)。この図をみると、大規模な古墳群が営まれている地域にはヘラ記号

が分布していて、県内で地域的な差はみられない。また、須恵器のヘラ記号が未確認の桜山窯や、末野窯跡群に隣接する小前田古墳群、箱崎古墳群でもヘラ記号が確認されている。中でも出土量が、群を抜いて多いのは、埼玉古墳群を中心として、その埴輪生産にあたっていた生出塚遺跡・新屋敷遺跡である。

埴輪につけられたヘラ記号は「×」「—」「＝」など、後の須恵器につけられる記号が大半を占める。そのほか、須恵器には見られない「∩∩」や「∩∩ʔ」のように曲線を多用するものや、「⋕」がまとまってみられる。これら特殊な記号は特定の古墳（群）からしか出土しておらず、需給関係を示すものと思われる。

またヘラ記号の分布傾向は、荒川以北では「×」よりも「—」が多く、荒川以南や埼玉古墳群周辺では逆に、「×」が主体となることがあげられる。

窯の使用や、児玉地域に見られるタタキ目をもつ埴輪の存在から、埴輪生産に須恵器工人が関与していたことが指摘されているが、後に述べるように8世紀以降、荒川以北では須恵器のヘラ記号がまとまって出土する遺跡はみられず、埴輪生産がその後の須恵器生産に直接結びついていくとは考えにくい。

しかし、埴輪にみられる「×」「—」などの記号は、8世紀以降の須恵器と同じように数量把握や仕訳作業を目的とするものであると考えられ、窯を使用して大量生産をする埴輪にはこれらの作業が不可欠であったことをうかがわせる。

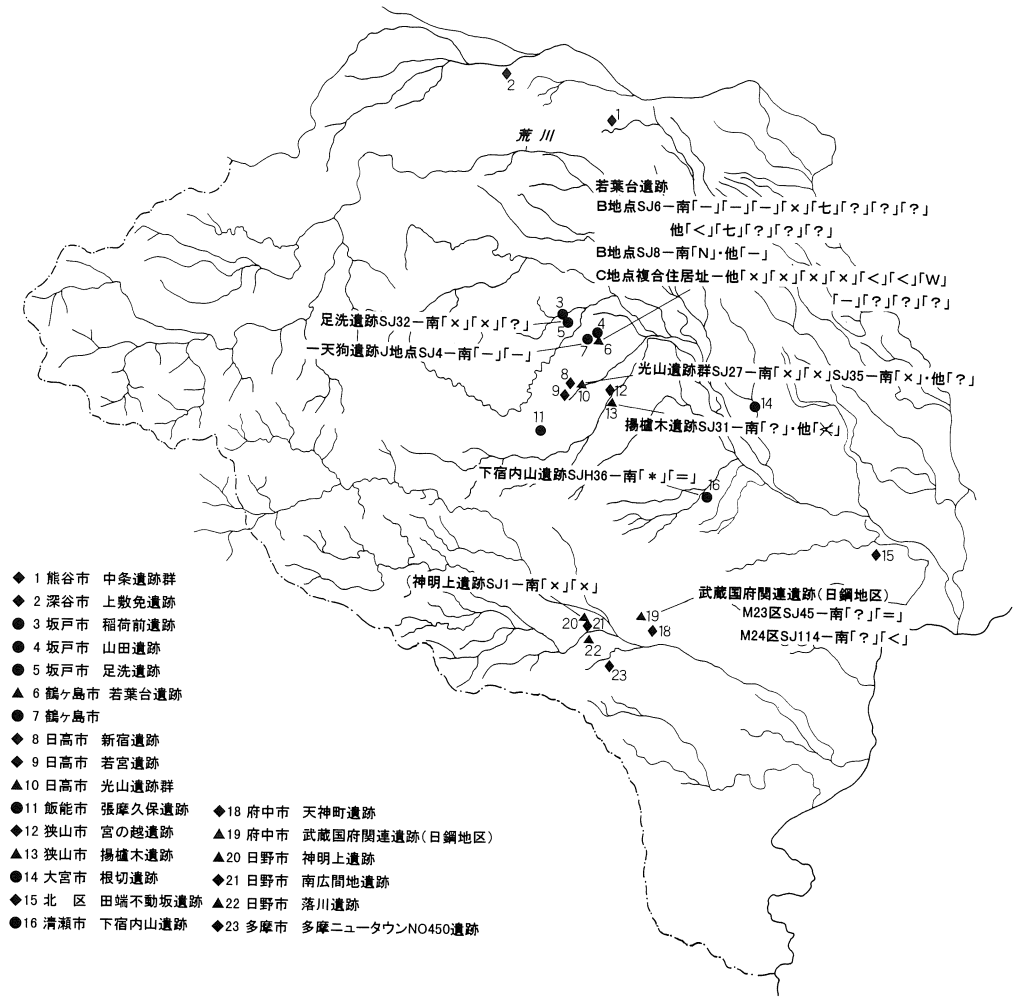
逆に古墳時代の須恵器についているヘラ記号は、散発的にしかみられず、そのほとんどが搬入品である可能性が高く、南比企産のヘラ記号もわずかに2点しか確認されていない。古墳時代における武蔵国の須恵器生産では、数量把握や仕訳などの作業が必要ではなかったのである。このことは、武蔵国における古墳時代の須恵器生産が、小規模・単発的であることと関係があると考えられるのである。そして、搬入された須恵器に主にヘラ記号がみられるということは、その生産地（東海がほとんどである）では、数量把握や仕訳作業が必要になるほどの大規模な生産が行われ、それは広範囲な流通を想定していたからにほかならないのである。

【8世紀前半（第4図）】

古墳時代の様相が一変するのは8世紀になってからである。南比企地域において大規模な窯跡群が形成されるのに合わせて、この地域を中心に大量のヘラ記号がみられるようになる。南比企窯跡群のこの段階の操業には美濃須衛の工人が関わっていたことが指摘されている（渡辺1991）。ヘラ記号の積極的な使用も、これらの工人と関わりがあるのであろう。

第4図の●◆▲記号の意味については先述の通りである。また、一つの遺構（ただし住居跡・土壙に限る）から複数のヘラ記号・文字が出土している遺跡については、図上に遺跡名と出土遺構、出土した記号・文字を示した。これは、ヘラ記号の集成作業を行っている際に、一遺跡内で特定の遺構から、複数のヘラ記号・文字が、出土する傾向が確認されたためである。

さて、分布図を見ると、ヘラ記号が出土している遺跡は南比企窯跡群周辺（第4図3～7）と武蔵国府周辺から多摩川中流域（第4図18～23）の2カ所に集中する傾向がある。荒川以北ではわずかに2遺跡だけしか出土していない。



第４図　８世紀前半の集落出土ヘラ記号・文字の分布（供膳具）

注目されるのは南比企産のヘラ記号しか出土しない遺跡の分布範囲が意外と狭く、南比企窯跡群に近接する越辺川流域に集中することである。このことは、南比企窯跡群の８世紀以降の操業が、単に武蔵国府を目的としていたとは限らないことを示している。

次に特定の遺構から複数のヘラ記号が出土した遺跡をみてみる。このような遺跡は８遺跡確認された。このうち揚櫨木遺跡・下宿内山遺跡・武蔵国府関連遺跡（日鋼地区）の３遺跡を除いて、一つの遺構から同じ記号が検出されている。また、若葉台遺跡では、１遺構当たりの出土点数が多く、異質な印象である。

一方、荒川を境に北の加美・児玉・那珂・榛沢・幡羅・大里・男衾郡ではヘラ記号のついた須恵器は少ない。荒川北岸の男衾郡には末野窯跡群が６世紀後半から営まれ、特に８世紀初頭には、大型の坏が広く流通することが指摘されている（渡辺1995）。報告書だけでは末野産のものか分からないが、仮にこの地域の須恵器に末野産のものが多いとすると、末野産のものにはヘラ記号がほとんどつけられないということになる（註２）。先述の通りこの地域でも古墳時代には、埴輪に多くのヘ

遺跡名	×	卄	卄卄	*	卄	〒	〒	≦	≮	卌	卄、＜	卅	春	線刻	田，三	？	総計
上里町　若宮台遺跡										1							1
神川町　皀樹原・檜下遺跡			2								1						3
本庄市　古井戸遺跡	16	3	1		1							1					22
本庄市　大久保山遺跡	4																4
本庄市　八幡A遺跡									1								1
本庄市　薬師堂遺跡	2																2
熊谷市　下辻遺跡					1												1
熊谷市　東川端遺跡	1																1
江南町　丸山遺跡	2																2
東松山市　代正寺遺跡	1																1
蓮田市　荒川附遺跡	3																3
庄和町　馬場遺跡							1										1
浦和市　本村遺跡	1																1
世田谷区　喜多見陣屋遺跡													1				1
清瀬市　下宿内山遺跡	1																1
府中市　武蔵国府（日鋼地区）	4	1														1	6
日野市　神明上遺跡	1	1		2													4
日野市　神明上北遺跡	1																1
日野市　南広間地遺跡	2			1												9	12
日野市　落川遺跡	6					1		1									8
八王子市　弁天池北遺跡	2																2
多摩ﾆｭｰﾀｳﾝNO415														1			1
多摩ﾆｭｰﾀｳﾝNO426	1																1
町田市　川島谷遺跡群															1		1
総計	48	5	3	3	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10	81

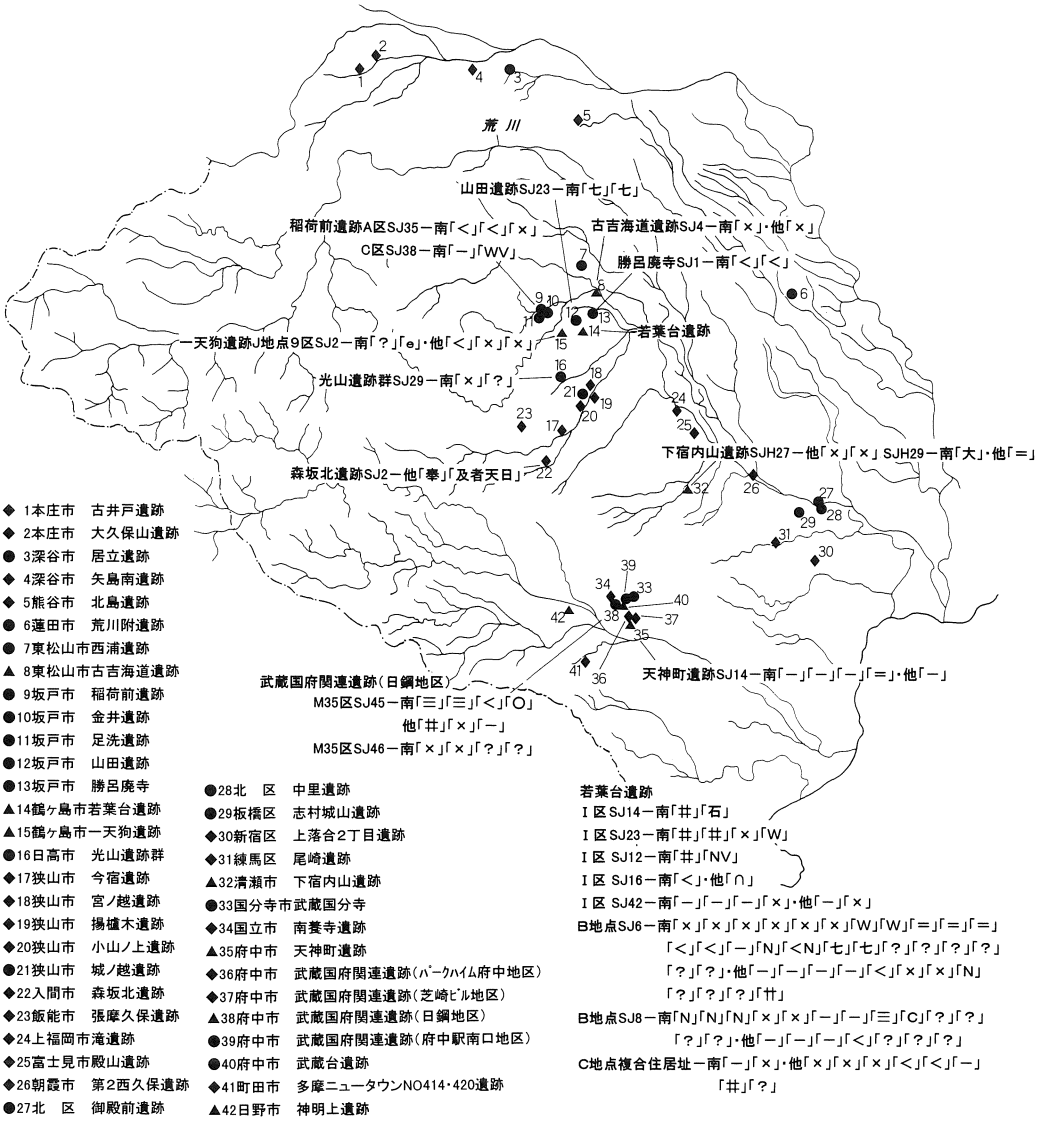
第５表　土師器供膳具のヘラ記号・文字

ラ記号がつけられていたわけで、埴輪生産と須恵器生産が直接結びつく可能性が低いことは、先述の通りである。

この地域は、８世紀以降も土師器供膳具の生産が継続し、須恵器供膳具一色に変わる荒川以南の地域とは対照的である。第５表は武蔵国における土師器供膳具につけられたヘラ記号を遺跡ごとに示している。これをみると、荒川以北の地域で多くの記号がみられ、特に本庄市の古井戸遺跡からの出土が多い。しかし、土師器供膳具につけられた記号は、須恵器のヘラ記号に比べて細く、焼成前につけられたものか、焼成後につけられたもの（線刻）か区別がつかないものがほとんどである。

さらに暗文土器の暗文の一部として表現されていると考えられるものもあるため、須恵器のヘラ記号と同列に扱うわけにはいかない。つまり、これらの地域では、ヘラ記号を必要としない古墳時代以降連綿と続く土師器供膳具の生産・流通体制が維持されていたといえるのであり、須恵器生産にもその伝統が維持されていた可能性がある。もちろん窯跡群を形成するような須恵器と土師器の生産体制が同じであったというのではなく、土器の生産・流通過程において、ヘラ記号・文字というものを必要としない別の方法をとっていたと思われるのである。

土師器のヘラ記号の出土している地域は、もう一つ南多摩地域にまとまりがみられる。この地域でヘラ記号がつけられている土師器供膳具は、荒川以北のものとは異なり、ロクロ整形された「盤状坏」といわれるもので、出現契機は不明であるが、７世紀末から８世紀前半にかけて須恵器生産と似た条件で生産されたものである。南多摩地域では、土師器のヘラ記号は須恵器同様の意味を持っていたといえるであろう。



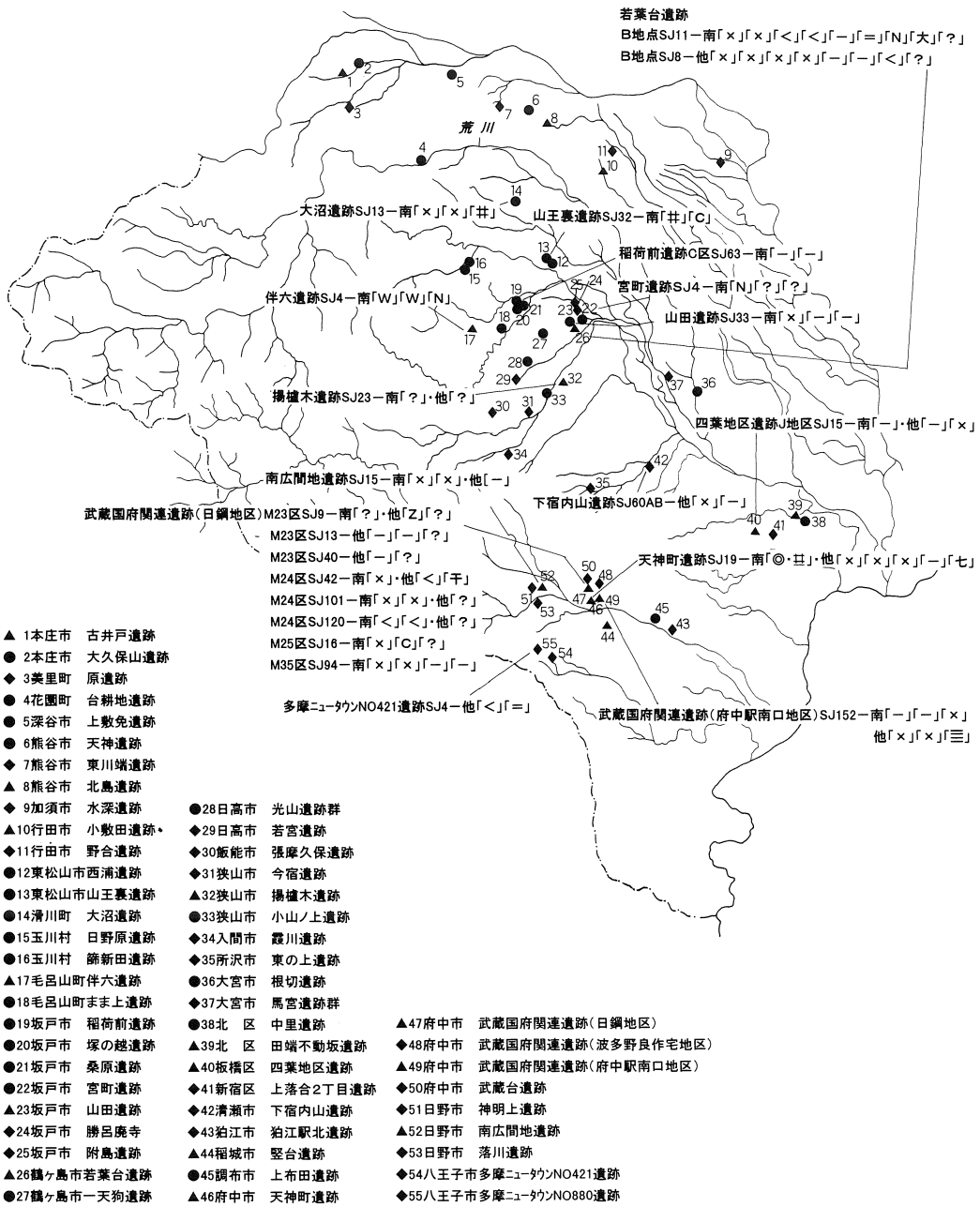
第５図　８世紀後半の集落出土ヘラ記号・文字の分布（供膳具）

【８世紀後半（第５図）】

南比企窯跡群の操業が最も活発に行われた時期である。この時期も８世紀前半同様に分布の中心は、南比企窯跡群周辺と武蔵国府周辺である。そのほか入間川流域（第５図17～22）や豊島郡衙である御殿前遺跡周辺（第５図27・28）にまとまりがみられる。

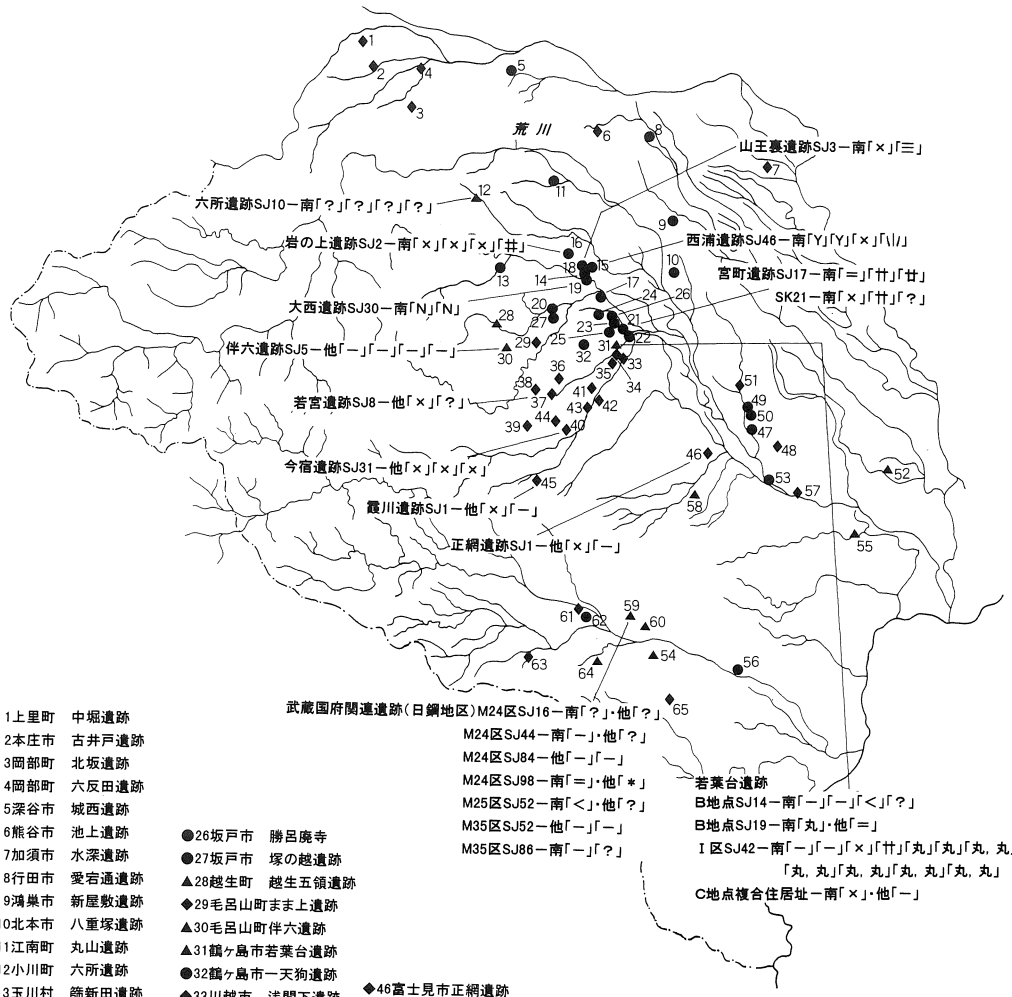
荒川以北では相変わらず出土例は少ない。この時期に末野窯跡群は一時生産量が減少し、南比企産の須恵器が一定量供給されるようになるが（渡辺1995）、ヘラ記号・文字の出土が荒川以南のように特定の遺構から複数検出されることはなく注目される。

南比企窯跡群周辺では、ヘラ記号・文字が出土する遺跡は増加している。しかし、南比企産のものしか出土していない遺跡は、南比企窯跡群に隣接する遺跡（第５図７～13）に限られ、若葉台遺跡（第５図14）より南では、８世紀中葉以降に生産を開始した東金子窯跡の製品も混在するように



第6図　9世紀前半の集落出土ヘラ記号・文字の分布（供膳具）

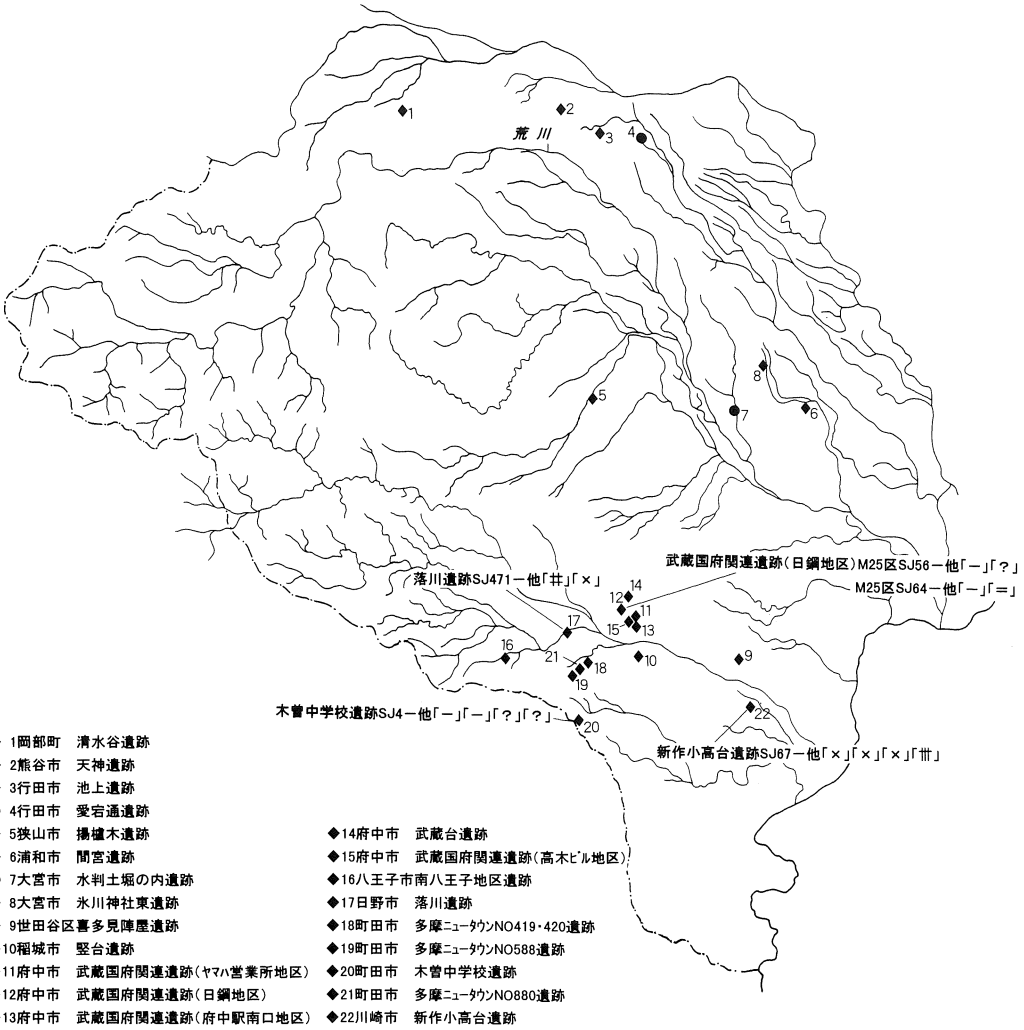
なる。なかでも東金子窯跡群に隣接する、入間川流域の今宿遺跡・宮ノ越遺跡・揚櫨木遺跡・小山ノ上遺跡では、南比企産のヘラ記号は出土していないなど、窯跡群ごとに一定の流通範囲があったことを想定させる。このように窯跡群の形成は、周辺集落の増加（入間川流域の開発の活発化）と無関係ではなく、武蔵国府への須恵器供給も行われたであろうが、これらの集落に須恵器を供給することも重要な目的であったといえるのである。



第７図　９世紀後半の集落出土ヘラ記号・文字の分布（供膳具）

特定の遺構から複数のヘラ記号・文字が出土する遺跡は８世紀前半より増加し、11遺跡となる。これらの遺跡のなかで、特筆されるのは若葉台遺跡である。若葉台遺跡では、特定の遺構から複数のヘラ記号・文字が出土している例が８遺構でみられ、Ｂ地点６・８号住居跡では20点を超えるヘラ記号・文字が確認されている。後述するように、これらの遺構は遺跡内で集中する傾向がみられ、土器の管理を考える上でもポイントとなる。

武蔵国府周辺（第５図33～40）も遺跡数が増加している。出土するヘラ記号の産地は雑多であり、



第８図　10世紀の集落出土ヘラ記号・文字の分布（供膳具）

さまざまな窯から須恵器が供給されていたことを示している。

【９世紀前半（第６図）】

ヘラ記号・文字が出土する遺跡は確実に増加する。しかし、分布が集中する地域は８世紀後半と変化はみられない。荒川以北でも出土遺跡は増加するが、まとまった出土がみられる遺跡は、検出されていない。

特定の遺構から複数のヘラ記号・文字が出土する遺跡も15遺跡と増加している。南比企窯跡群周辺では、これらの遺跡が増加しているが、若葉台遺跡では８世紀後半に比べて複数のヘラ記号・文字が出土する遺構が急激に減少している。しかし、１遺構から出土するヘラ記号・文字は８点を超え、８世紀後半と似た出土の様相を示す。

その一方で、武蔵国府周辺では、特定の遺構から複数検出される例が増加し、武蔵国府関連遺跡（日鋼地区）では８世紀後半に２遺構しかみられなかったが、８遺構で複数のヘラ記号・文字が検

出されている。しかし、若葉台遺跡と比べて、１遺構当たりの出土量は多くなく、多い遺構でも４点である。

【９世紀後半（第７図)】

ヘラ記号が出土する遺跡は増加を続け、65遺跡を数える。その分布は、相変わらず南比企窯跡群周辺・入間川流域に集中するが、新たに大宮台地周辺で遺跡が確認されるようになる（第７図47～51)。また、９世紀前半にかなりの密度で分布していた武蔵国府周辺では、ヘラ記号･文字の出土する遺跡は減少している。

特定の遺構から複数のヘラ記号・文字が出土する遺跡は13遺跡とこの時期に初めて減少する。これは、南武蔵での出土例が減少したためで、北武蔵（現在の埼玉県）だけをみれば、８遺跡から12遺跡と増加しているのである。つまり、この時期以降、南比企・東金子窯跡群から武蔵国府への須恵器の供給は減少し、両窯跡群とも近隣の集落への供給を第１の目的としているのである。このような状況の中で、武蔵国府関連遺跡（日鋼地区）の存在は特異であり、検討が必要である。

若葉台遺跡では、特定の遺構から複数検出される例が再び増加する。なかでもＩ区42号住居から「丸」「丸、丸」(坏の底部と体部に描かれている）（註３）というヘラ文字が、まとまって出土した例は注目される(第９図)。このように１遺構内から、７点にものぼるヘラ文字が出土した例は他にはみられず、「丸」というヘラ文字も他の遺跡からは出土していない。ヘラ文字の意味を考える上で重要である。

【10世紀（第８図)】

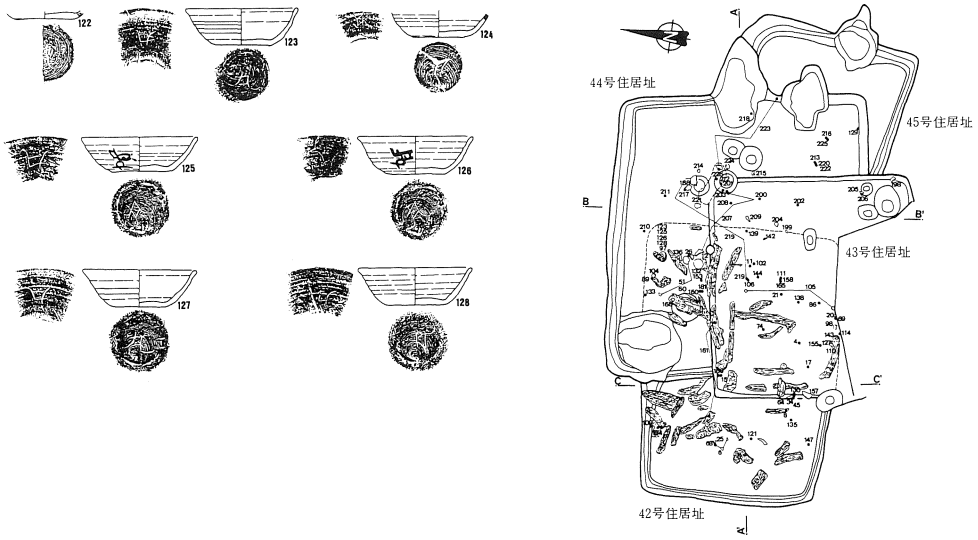
これまでの様相は一変する。それまでヘラ記号が集中的に出土していた南比企・東金子窯跡群周辺からはまったく出土がみられなくなる。これは、両窯跡群が群を構成するような生産体制から分解し、いわゆる「里の須恵器」となり、これまでとは根本的に異なる、須恵器の生産・流通体制となったことの表れである。

こうした中で、武蔵国府周辺では南多摩窯跡群が武蔵国唯一の大規模窯として操業される。これは９世紀後半にみられた、南比企・東金子窯跡群から武蔵国府周辺への須恵器供給が滞ってきたことと関係があるといえる。南多摩窯跡群は、武蔵国府を第１の供給先として操業を開始したのである。

以上、武蔵国のヘラ記号・文字について時期別にその分布をみてきた。こうした中で、特定の遺構から複数のヘラ記号・文字が検出される遺跡の存在が浮かび上がってきた。

これらの遺跡は、調査面積が多いこともあるが、周辺の遺跡に比べて規模の大きい遺跡であることが指摘できる。若葉台遺跡のように、大規模な掘立柱建物跡が計画的な配置をみせ、西大寺榛原庄、官人居宅、郡衙などと推定されるものや、若葉台遺跡に隣接し、漆紙文書が出土した一天狗遺跡、高麗郡の設置と関連するといわれる光山遺跡群や若宮遺跡、官人層の居宅と考えられる稲荷前遺跡、推定武蔵国府に接し、多くの住居跡が検出された武蔵国府関連遺跡（日鋼地区）など、地域の中核となるような遺跡である。

複数のヘラ記号・文字が出土している遺構は、出土量こそ少ないが、先に述べた鳩山窯跡群広町Ｂ２号住居にみられた状況と類似するものである。もちろん集落遺跡から出土したものは破損品で



第９図　若葉台遺跡Ｉ区42号住居のヘラ文字

はなく実際に使用されていたものであるが、広町Ｂ２号住居などで「２次選別」された土器が(さらにいくつかの選別が行われた可能性があるが)、束にされてこれらの遺跡･遺構に持ち込まれたといえる。

そして、これらの遺跡内でさらに選別仕訳などの作業が行われ、遺跡内での消費はもちろん、これらの中核的な遺跡を営む在地有力者（富豪層）に関係する周辺の遺跡に、再分配されていった可能性が指摘できよう。そして集落における選別や仕訳作業にヘラ記号が利用されたことは十分考えられるのである。

そこで次に、集落内でのヘラ記号･文字の出土状況について、代表的な遺跡を取り上げてみたい。

4　集落内でのヘラ記号・文字の出土状況

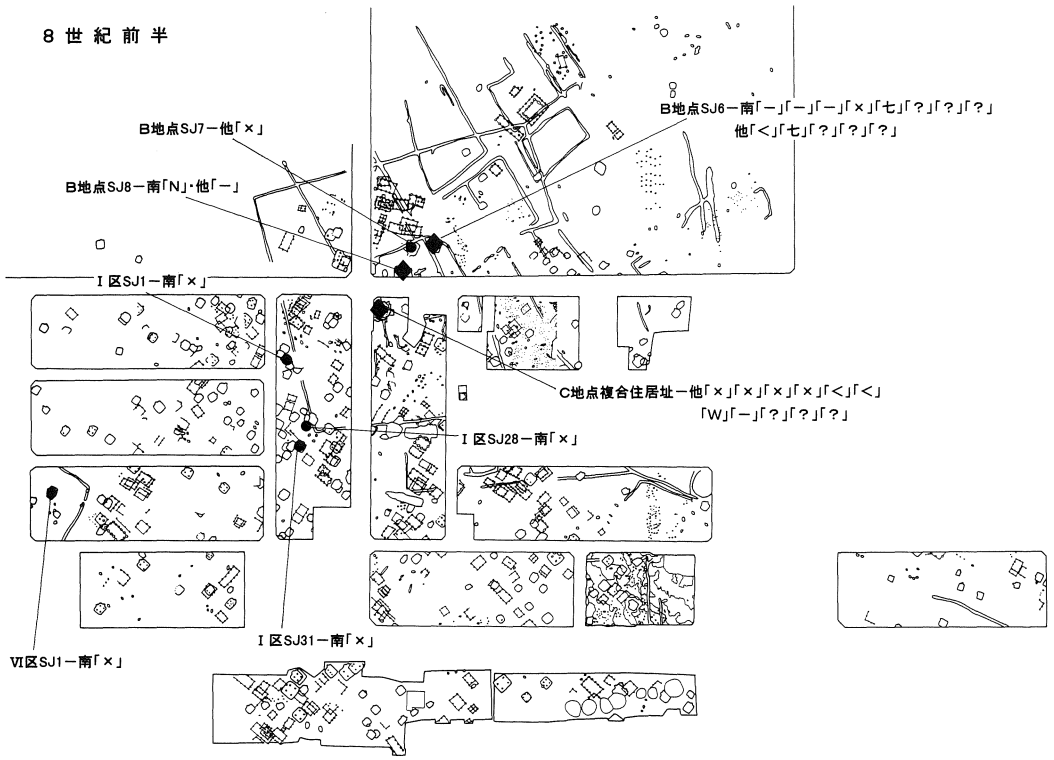
【若葉台遺跡】

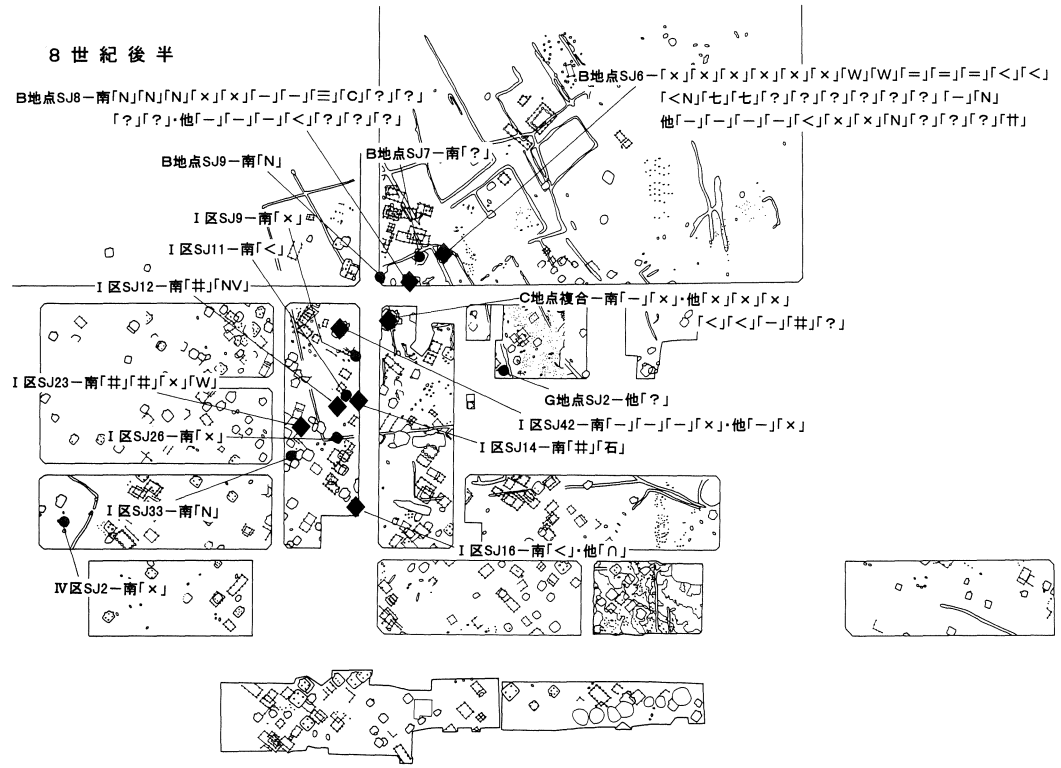
若葉台遺跡は、鶴ヶ島市と坂戸市にまたがる、高麗川と小畦川に挟まれた台地に位置する。周辺には７世紀後半以降、多くの遺跡がみられる。検出された遺構は掘立柱建物跡50棟以上、竪穴住居跡150軒以上にのぼり、その性格が問題とされている遺跡である。

第10・11図は若葉台遺跡から出土したヘラ記号・文字の分布を時期ごとに示したものである。８世紀前半（第10図上）にはＢ地点第６・８号住居、Ｃ地点複合住居に集中的にヘラ記号・文字がみられる。そのほかＩ区に散発的な分布がある。

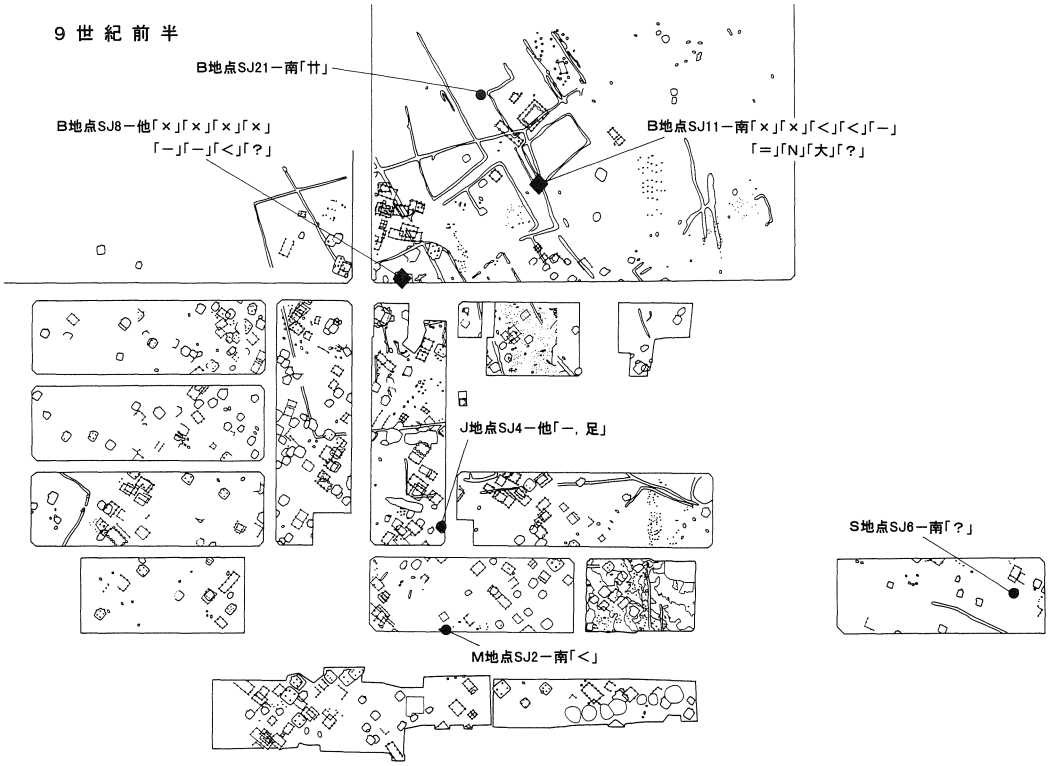
ヘラ記号･文字の種類は、Ｂ地点６号住居に「一」「七」が、Ｃ地点複合住居に「×」が集中する傾向がみられる。特に、Ｃ地点複合住居より西は、「×」のヘラ記号だけが分布していて、集落内での須恵器の分配関係が認められる。

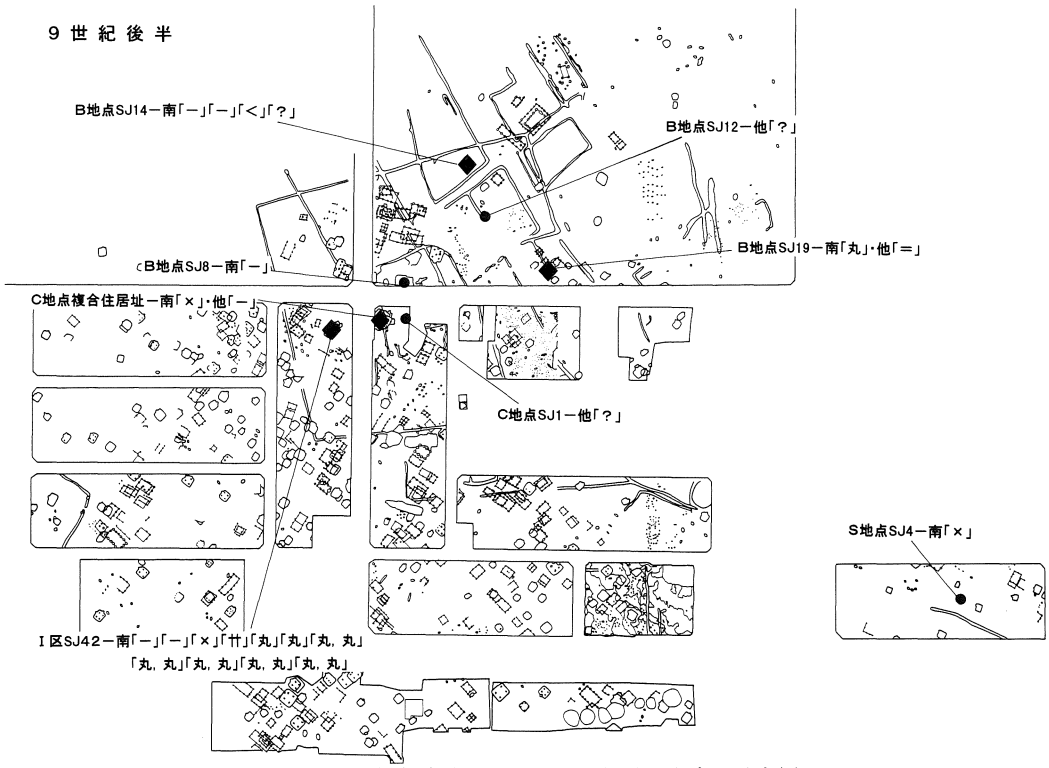
８世紀後半（第10図下）は、若葉台遺跡でヘラ記号・文字が最も多く出土する時期である。８世紀前半から引き続き、Ｂ地点６・８号住居、Ｃ地点複合住居からの出土が目立つ。そのほか、Ｉ区





第10図　若葉台遺跡におけるヘラ記号・文字の分布(1)





第11図　若葉台遺跡におけるヘラ記号・文字の分布(2)

12・14・16・23号住居からも複数のヘラ記号・文字が出土している。

ヘラ記号・文字の種類では、「N」がB地点から主に出土し、「七」は8世紀前半同様にB地点6号住居からしか出土していない。また、「廾」はB地点からは出土しない。

9世紀前半（第11図上）になると様相は一変する。ヘラ記号・文字の出土量は減少し、B地点6号住居からの出土はみられなくなってしまう。しかし、B地点から出土が多い傾向は8世紀代から継続し、B地点8号住居からは、8点のヘラ記号が出土している。8世紀後半には分布が集中していたⅠ区には出土がみられなくなり、B地点以外の出土はわずかである。

9世紀後半（第11図下）になると、再びヘラ記号・文字は増加する。B地点から多く出土する傾向は変わらないが、出土する遺構は14・19号住居へと変化する。また、9世紀前半に出土がみられなかったC地点複合住居でも出土がみられる。特に注目されるのは、Ⅰ区42号住居で、「丸」「丸，丸」（坏底部と体部につけるもの）が7点まとまって出土したことである。ヘラ文字は先述したように、ヘラ記号と異なり特定の供給先を示していると考えられることからも興味深い。

以上、若葉台遺跡におけるヘラ記号・文字の出土状況についてみてきたが、ここでその特徴をまとめてみる。

若葉台遺跡では、特定の地点からヘラ記号・文字が集中して出土する。B地点6・8号住居、C地点複合住居周辺がそれである。これらの遺構の出土遺物は、複数の時期にまたがり、さらに出土量も多いことから、廃棄の可能性が高いが、それにしてもこの周辺でヘラ記号・文字がまとまった形で使用されていたことをうかがわせる。

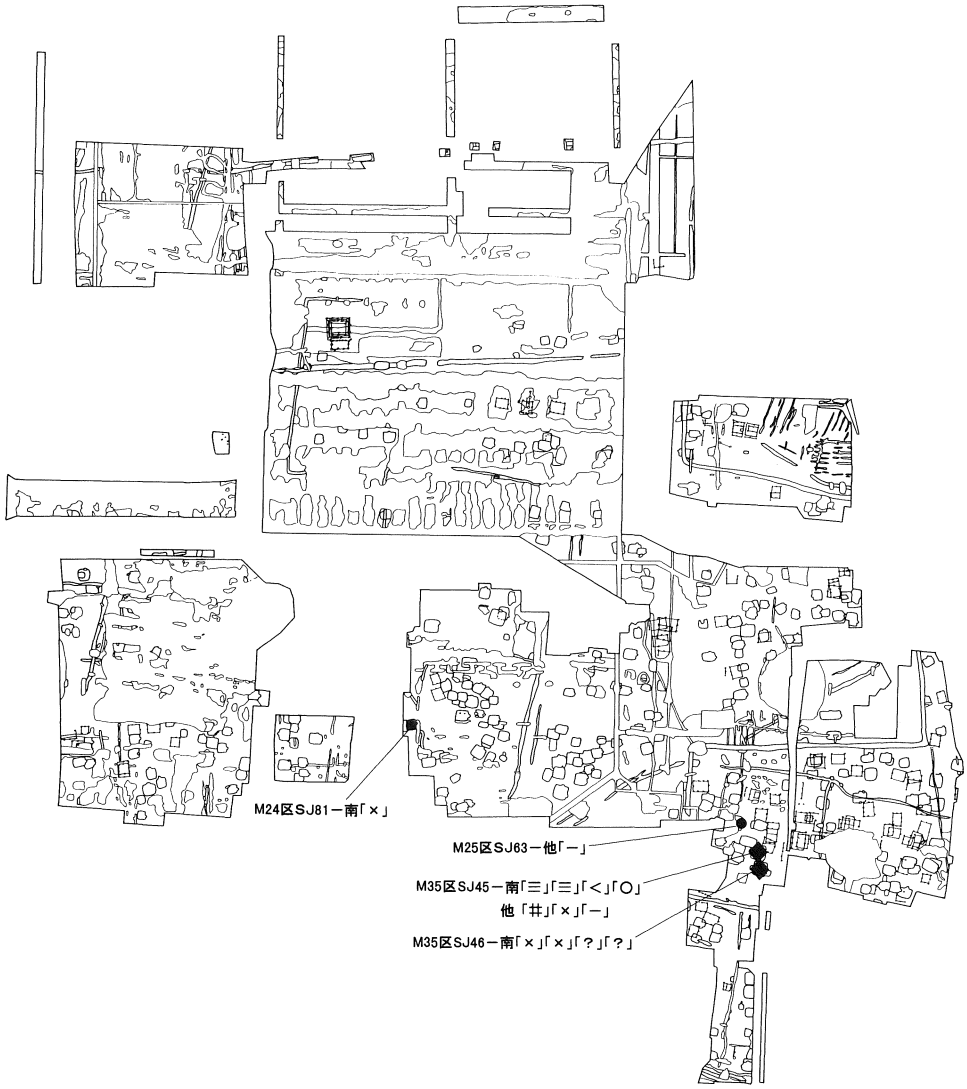
ヘラ記号の用途については、窯場における日常的な作業（数量把握・仕訳）に不可欠なものであり、集落出土のものにも、窯場と類似点がみられることから、集落内でもこれらの作業が行われていたといえる。特に若葉台遺跡では、複数の時期にわたり多量のヘラ記号・文字を出土する遺構が集中することから、遺跡内で使用される須恵器供膳具は、一括管理されていた可能性があり、必要に応じて分配され、回収されていたのであろう。

石川県松任市と金沢市にまたがる、東大寺横江庄遺跡の上荒屋地区遺跡では、「東庄」と書かれた墨書土器が多量に出土し、この意味を「東にある庄家」と解釈して庄家ごとに多量の土器を管理していたと考えられている（出越1993・木田他1996）。若葉台遺跡でも似たように形で土器が管理されていたのであろう。ヘラ記号・文字が集中する地域では「時山」と読める墨書土器が多量に出土することも示唆的である。

【武蔵国府関連遺跡（日鋼地区）】

武蔵国府周辺は、800次近い調査が行われ、次第に国府およびその周辺の様相が分かりつつある。日本製鋼所地区（日鋼地区）は、国府の中心と思われる京所地区（大国魂神社東側）の北西に位置する遺跡である。4万㎡を超える調査により竪穴住居跡を主体とする多くの遺構が検出された。日鋼地区を国府域とするかどうかについては論の分かれているところである。

8世紀前半（第12図）では、調査区の南西にあたるM35区45・46号住居から、複数のヘラ記号が出土し、隣接するM24区81号住居から1点出土している。特にM35区45号住居からは、7点の記号が出土し、南比企産の「三」が2点みられる。「三」は南比企窯跡群から3点、集落出土のものと合

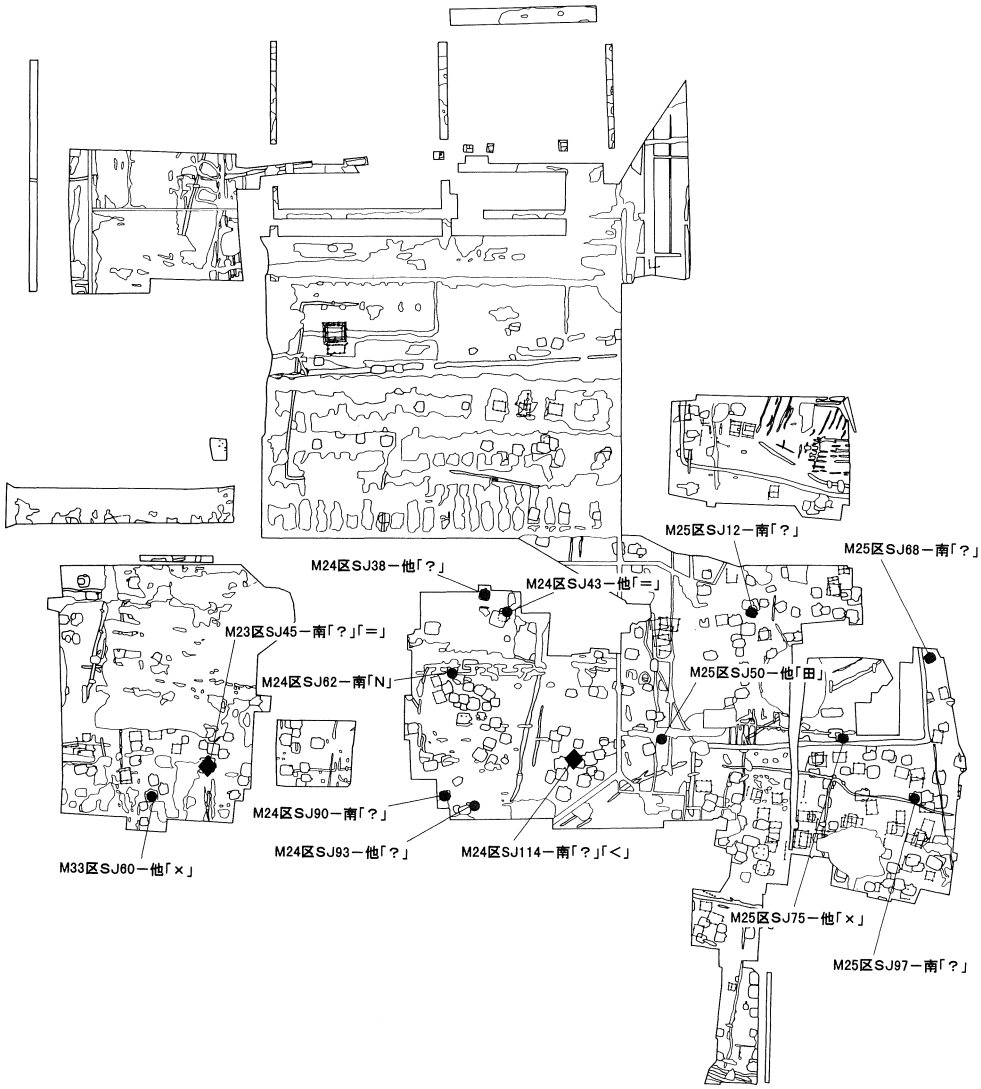


第12図　武蔵国府関連（日鋼地区）におけるヘラ記号・文字の分布（８世紀前半）

わせても10点と出土量が少ない(第１・２表)。つまりM35区45号住居から出土した須恵器供膳具は、ある程度まとまった形で持ち込まれたものといえるのである。

８世紀後半（第13図）になると、ヘラ記号・文字の出土量は増加する。しかし、分布状況は８世紀前半と異なり調査区南半分に広範囲にみられるようになる。１遺構から複数のヘラ記号が検出されたのは、M23区45号住居とM24区114号住居の２軒だけであり、それもそれぞれ２点だけの出土である。

この状況を若葉台遺跡と比較してみると、若葉台遺跡では１遺構から10点以上のヘラ記号・文字が確認され、須恵器供膳具の分配と回収を繰り返していた管理方法がとられていたと思われる。しかし、日鋼地区にみられる状況は、分配された後の状態を表しているものと言え、若葉台遺跡と日

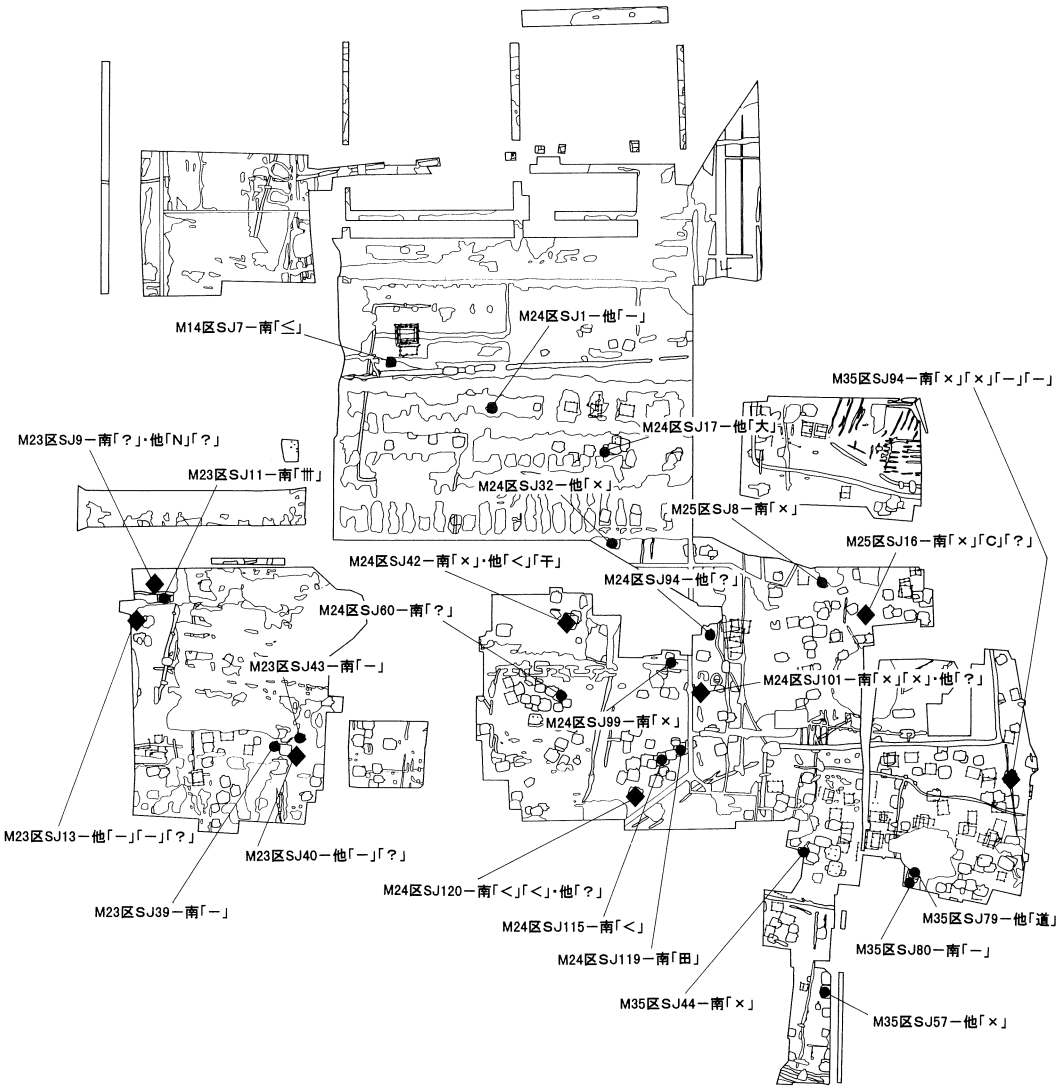


第13図　武蔵国府関連（日鋼地区）におけるヘラ記号・文字の分布（８世紀後半）

鋼地区の須恵器供膳具の管理方法に違いがあったことが分かる。

９世紀前半（第14図）になっても、調査区内に広くヘラ記号･文字が分布する傾向がみられるが、複数のヘラ記号・文字が出土する住居と、１点だけ出土する住居がいくつかの単位でまとまっている。M23区40号住居と39・43号住居やM24区120号住居と115・119号住居、M25区16号住居と８号住居などがそれである。これらの単位では、同じヘラ記号を共有しており、複数のヘラ記号・文字が出土する住居から、須恵器供膳具が分配されていたことを思わせる。このことは、日鋼地区において、ある程度の単位で集団が括られていた可能性を示すもので、遺跡の性格を考える上で重要である。墨書土器の分布と合わせて検討する必要がある。

９世紀後半（第15図）になると、調査区中央南側のM24・25区に出土が集中するようになるが、



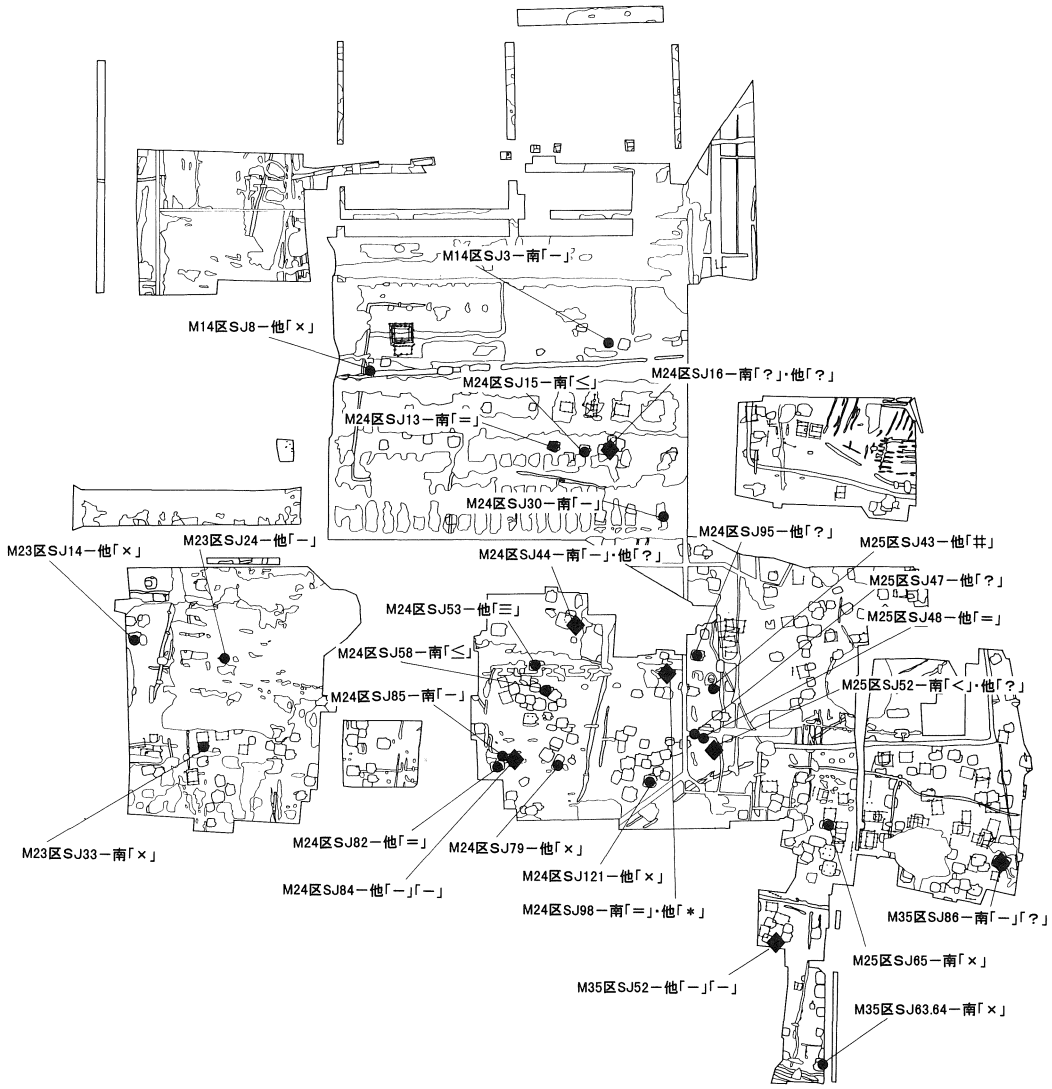
第14図　武蔵国府関連（日鋼地区）におけるヘラ記号・文字の分布（9世紀前半）

ここでも9世紀前半同様に、2～3軒の単位が確認できる。

この状況が一変するのは、10世紀になってからである(第16図)。出土量は大幅に減少し、南比企産のものもみられなくなる。また8世紀後半から9世紀後半にかけてみられた、数軒の単位の把握もできなくなる。集落の衰退とも関連するが、南比企窯跡群を中心とした須恵器生産体制の崩壊も大きく影響していると考えられる。

ここまで、代表的な2つの遺跡について、ヘラ記号・文字の出土状況について述べてきたが。若葉台遺跡と武蔵国府関連遺跡（日鋼地区）とでは、須恵器供膳具の管理方法が異なることが分かった。このことは、遺跡の性格の違いを表すものと思われる。

若葉台遺跡では、日常使用される供膳具までが分配・回収され一括管理されていたのであり、そ

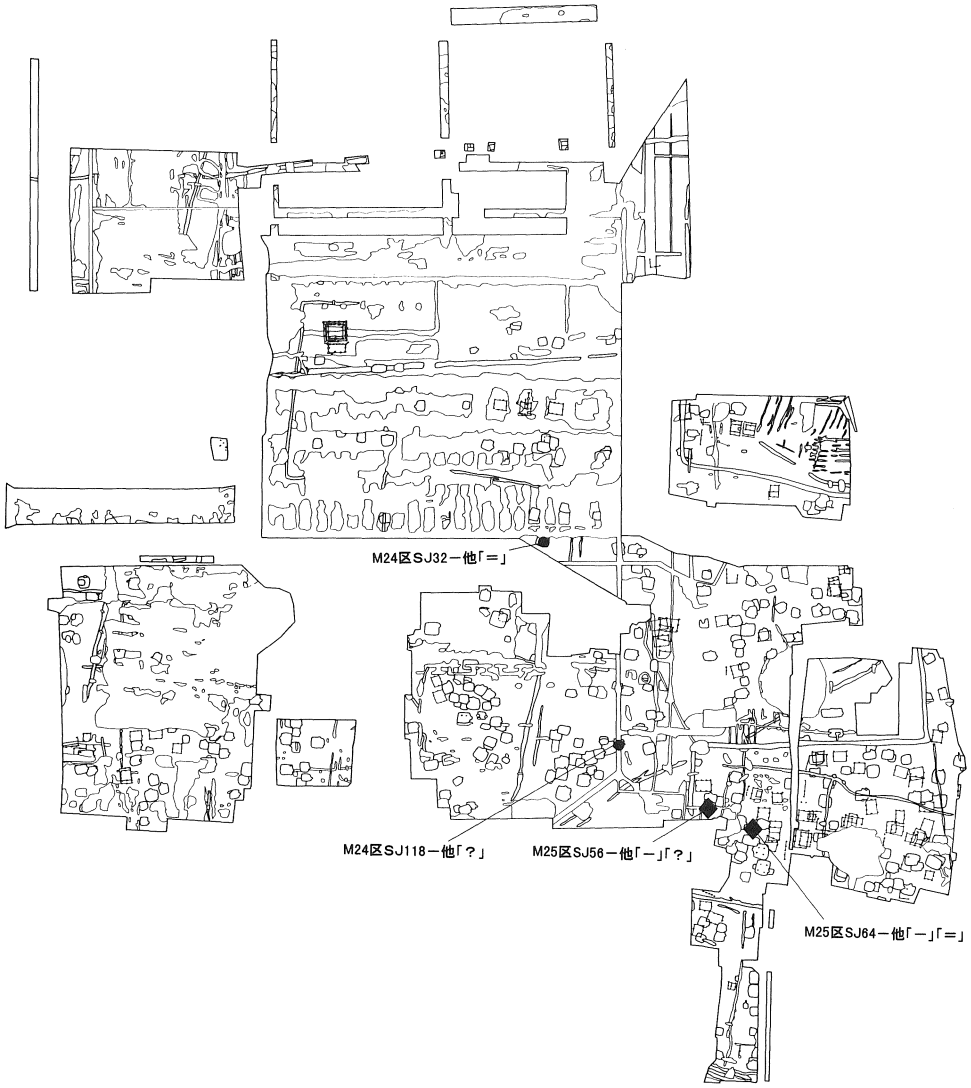


第15図　武蔵国府関連（日鋼地区）におけるヘラ記号・文字の分布（９世紀後半）

こには、日常生活の臭いは薄いのである。若葉台遺跡の運営が極めて機械的に行われ、そこにいた住人達も長期・安定的に暮らしていたのではなく、必要に応じて若葉台遺跡に集住させられていたと考えられる。

一方、日鋼地区でも、集落成立の契機は強制移住など、政治的な背景が考えられるが、その後は、若葉台遺跡のような分配・回収ではなく、ある単位ごとに分配・再分配が行われていたのである。

つまり、若葉台遺跡と異なり、日鋼地区では、分配された須恵器が回収されることなく、個人または単位ごとの所有物として存在していたのである。集落全体としては政治的（軍団や国府建設・維持のためなど）な集団であった可能性があるが、そこでの生活自体は極めて日常的なものであったのである。



第16図　武蔵国府関連（日鋼地区）におけるヘラ記号・文字の分布（10世紀）

5　まとめ

ヘラ記号・文字について検討を重ねてきた。その結果、ヘラ記号とヘラ文字は異なる機能をもつものであり、記号が数量把握や仕訳など日常的な作業に不可欠なものであったのに対して、文字が供給先を表すものであることが推定できた。そして、集落出土の分析から、ヘラ記号や一部のヘラ文字が消費地である集落においても、数量把握や仕訳などの作業に利用されていたと考えた。

また、このような作業が行われた遺跡は、いままで官衙関連遺跡などと呼ばれてきた、地域の中心的な遺跡であることも分かった。しかし、その在り方は、若葉台遺跡と武蔵国府関連遺跡（日鋼地区）との違いにみられるように多様であるといえる。

窯の運営にしても、大規模な地域開発にしても、そこに投入されるのは在地の住人であり、これ

らを駆使できる存在は、その地域に根差した有力者にほかならない。これらの有力者（富豪層）は開発を盛んに行い、私腹を肥やしさらに開発を行っていくのである。この拠点となる遺跡は、郷家や郡家などだけでなく、荘園や勅旨田、親王賜田など中央の貴族・寺社と結びつくものなども含まれ、様々な形の開発が行われたのであろう。

そしてこれらの集落には、彼ら自身が経営していた窯業製品を、優先的に融通していたと考えられるのである。このように須恵器の生産と流通は、在地勢力の存在なくしては考えられないのであり、逆に言えば武蔵国では国府・国司の介入は希薄であったと考えるべきであろう。

さらに、武蔵国におけるヘラ記号・文字の様相は、9世紀末～10世紀を境に大きく変化している。これは律令制度の解体と無関係ではなく、在地の須恵器生産・流通にも大きな影響を与えたのである。

武蔵国では、9世紀末～10世紀初頭以降ロクロ整形された供膳具は粗悪化の傾向がみられ、代わって供膳具に一定量の灰釉陶器がみられるようになる。この灰釉陶器は、主に静岡県西部を中心とする東海地方で生産されたものであると考えられるが、この灰釉陶器にヘラ記号がついているものが、埼玉北部の上里町中堀遺跡で出土している（田中・末木1997）。54号掘立柱建物跡で6点の灰釉陶器にヘラ記号がみられる。いままでヘラ記号のまとまった出土がみられなかったこの地域で、特定の遺構から複数のヘラ記号がまとまって出土していることは、遠距離の生産地から直接かつ大量に灰釉陶器を手に入れていたことを示していて興味深い。

また、北武蔵から上野にかけて10世紀以降煮炊具の主体となる羽釜は、粗雑化し多様になる供膳具と異なり、統一されたプロポーション・整形技法・分布から、大量生産され広範囲な流通が想定できるものであるが。この羽釜の底部にもヘラ記号がつけられるものが、中堀遺跡や本庄市大久保山遺跡などでみられるようになる。

灰釉陶器や羽釜にみられるヘラ記号の在り方は、荒川以北の9世紀後半までの須恵器流通からは考えられないものであり、大きな変動がこの地域にも及んだことを示している。

最後に、文字瓦との比較も検討してみよう。武蔵国の窯業は瓦陶兼業が特色であり、これらの瓦には郡・郷・人名などが記されているものがみられる。上原真人氏は東国の国分寺から出土した文字瓦の検討から（上原1989）、東国における国分寺への瓦供給は、「『知識』に名を借りた収奪であり、『寄進の強要』と理解すべき」と述べて、瓦陶兼業であっても須恵器生産と瓦生産では生産契機が異なることを指摘した。また、東海道諸国のように国分寺瓦の生産に当たって、国分寺付近に専用の瓦窯を設置するのと異なり、東山道諸国（武蔵・上野・下野）では、瓦窯は分散し瓦陶兼業窯であることから、窯業生産の主導権は郡司層が握る「郡司主導型」であるとしている。

武蔵国では須恵器のヘラ記号・文字の分析からも、窯跡と窯跡群周辺の集落（中でも開発拠点となる）との関連が極めて強いことが言える。そして、これらの集落を経営していたのが郡司層を主体とする在地有力者（富豪層）であることは言うまでもない。このように、武蔵国における窯業生産への国府・国司の直接的な関与（実際の経営・流通）は薄く、極めて在地に根差したものであったといえるのである。

おわりに

ヘラ記号・文字についてみてきたが、そこには窯場における生産だけでなくその流通過程を探る重要な手がかりが存在していた。本論では、ヘラ記号とヘラ文字で性格が異なると分析したわけだが、ヘラ記号の中にも、出土量が5点に満たないものもあり、これらの記号の意味についても再検討が必要であろう。また、荒川以北で須恵器のヘラ記号・文字がまとまった形で出土していないことも、単に南比企産の須恵器が束として流通しなかったというだけではなく、その必要性のなさから、発注者が故意にヘラ記号・文字がつけられている製品を受け入れなかったことも考えられ、ヘラ記号・文字がつけられる背景には、発注者の意図もかなり含まれていた可能性も指摘できよう。この点については今後さらに検討していく必要があろう。

本稿を作成するに当たり、様々な方々に御教示いただいた。文末ではあるが記して感謝申し上げる次第である。

赤熊浩一、大谷　徹、太田博之、加藤恭朗、田中広明、福田　聖、森原明廣

註

(1) 律令制以前のこの時期に、武蔵国の名称は適当ではないが、8世紀以降の分布と比較するために、ここでは武蔵国の名称を使用する。

(2) ヘラ記号がつけられているもので、報告書に末野産と明記されているのは、小敷田遺跡・築道下遺跡（いずれも行田市）だけである。また、末野遺跡（寄居町）からも大甕の頸部片に「⋔」のヘラ記号がつけられているものが出土している。

末野窯跡群は、現在埼玉県埋蔵文化財調査事業団において整理作業中である。このうち古墳時代の窯からはヘラ記号は検出されていない（福田1998）。古代（9世紀代）の窯からは1点だけ出土している。なお、整理を担当されている赤熊浩一氏、福田聖氏には、ヘラ記号の探索にお骨折り頂いただけでなく、須恵器の生産・流通について有益な御教示を頂いた。

(3) 実物をみたところ、書き順は「丸」と同じであるが、最後の一画である「丶」が長く、「丸」と読むには無理がありそうである。しかし、ほかに適当な文字も考えつかないため、報告書に従ってここでは「丸」として扱う。

参考文献

上原真人　1989 「東国国分寺の文字瓦再考」『古代文化』 VOL.41　古代文化研究会
加藤岩蔵　1970 『井ヶ谷古窯址群』 愛知教育大学
加藤恭朗他　1989・1993・1995・1997 『若葉台遺跡』 坂戸市遺跡発掘調査団
木田　清他　1996 『東大寺領横江庄遺跡Ⅱ』 松任市教育委員会
斉藤　稔他　1979・1980・1982・1983・1984 『若葉台遺跡群』 鶴ヶ島町教育委員会
出越茂和　1993 『上荒屋遺跡㈡』 金沢市教育委員会
田辺昭三　1966 『陶邑古窯跡群Ⅰ』 平安学園考古学クラブ
田中広明・末木啓介　1997 『中堀遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
富田和夫　1992 『稲荷前遺跡（A区）』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第120集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
中村　浩　1981 『和泉陶邑窯の研究』 柏書房
野上丈助　1980 「高蔵寺地区・陶器山地区出土のヘラ記号とその意味」『陶邑Ⅴ』 大阪府教育委員会
服部敬史　1981 『南多摩窯址群』 八王子バイパス鎚水遺跡調査会
久永春男　1958 「記号状刻文について」『刈谷市の古窯』

福田　聖　1998 『末野遺跡Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第196集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
山中　章　1989 「古代都城の線刻土器・記号墨書土器」『古代文化』 VOL.41　古代文化研究会
湯瀬偵彦他　1995 『武蔵国府関連遺跡調査報告』 日本製鋼所遺跡調査会
渡辺　一　1988 『鳩山窯跡群Ⅰ』 鳩山町教育委員会・鳩山窯跡群遺跡調査会
渡辺　一　1990a 『鳩山窯跡群Ⅱ』 鳩山町教育委員会・鳩山窯跡群遺跡調査会
渡辺　一　1990b 「南比企窯跡群の須恵器の年代―鳩山窯跡の年代を中心に―」『埼玉考古』 第27号　埼玉考古学会
渡辺　一　1991 『鳩山窯跡群Ⅲ』 鳩山町教育委員会・鳩山窯跡群遺跡調査会
渡辺　一　1992 『鳩山窯跡群Ⅳ』 鳩山町教育委員会・鳩山窯跡群遺跡調査会
渡辺　一　1995 「武蔵国の須恵器生産の各段階」『王朝の考古学』 雄山閣出版

研 究 紀 要　第14号

1 9 9 8

平成10年３月25日　印刷

平成10年３月31日　発行

発　行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108　大里郡大里村船木台４丁目４番地１

☎0493―39―3955

印　刷　朝日印刷工業株式会社